
IS 織斑一夏は男の娘

フリスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 織斑一夏は男の娘

【Nコード】

N2662T

【作者名】

フリスタ

【あらすじ】

IS…インフィニットストラトス。それは女性にしか反応しない兵器。織斑一夏は世界で唯一それを動かす事の出来る男の娘だった。

これは、もしも織斑一夏が【男の娘】だったら。という物語で、大体は原作通りに進んでいくと思われます。ちなみに作者はアニメと漫画しか見てません。

これはインフィニットストラトスの二次創作です。気に入らない人

は何も言わずに回れ右！

随時更新予定の主人公設定（前書き）

要望があればそれも検討したり書き足していきます。

随時更新予定の主人公設定

【主人公】

おりむらいちか
織斑一夏。

言わずと知れた(?) 男の娘。

身長…148センチ

もう少しで150というところに哀愁を感じる。

体重…38キロ

身長との平均でいくとギリギリラインでやせ過ぎず、
普通より軽い軽量ボディとなっております。

中学生の頃は友人から「いっちゃん」「一夏」と呼ばれていた。

普通に接されるのは良いが、過剰に「女だ!」というとヘコむ。

【見た目】

色素が薄く肌は白く、腰より下まで伸びている長い髪も薄い茶色。
髪は結ったりしてない。伸ばしてるだけ。

でもボサついたりはずえに綺麗にまとまっている。

目はパッチリお目々。イチコロだよ♪(なにを?)

※髪は姉である千冬から切る事を制限されている。
これはまた別の話で書くかも？

【好きな食べ物】

甘いモノ。ケーキにアイスは別腹思考。

【嫌いな食べ物】

辛いモノ。

あとは……随時書き足して行く。というか、「こんな娘が良い」という声も募集。

随時更新予定の主人公設定（後書き）

感想・アイディア・ネタ随時受付中です。

第01話「織斑一夏は男の娘？」（前書き）

予想より短編の反響があったから書いてみました。

では、第1話です。どぞ。

第01話「織斑一夏は男の娘？」

みなさん初めまして。

僕の名前は織斑^{おりむら}一夏^{いちか}って言います。

仲の良い友達は「いっちゃん」とか「一夏」って呼びます。

僕はついこの間、中学を卒業したばかりです。

そして、僕の目の前にあるこの大きくて近未来的な建物。

これがIS学園です。キレーですね。強そう(?)ですね。

なんか変形して大きなロボになったり

プールが割れる様に開いて大きなロボが出てきても不思議じゃないです。

【IS】 正式名称、インフィニットストラトス。

世界最強の兵器と言われています。

ですが万能ではありません。

女性にしか使えないモノで、男性が使う事は出来ません。

良く分かりませんがそーゆー兵器らしいです。

この兵器のおかげで女尊男卑。女性の方が強いんだーという感じになり、

男性の肩身は狭くなっていました。

男と女で戦争をしたら男が勝つ！　と言うのはかなり前の話。

大変ですね……。

でもそーでもないかも。だって仲良くしてれば戦争なんて起きないしね。

あゝ話を戻しますね。

このIS学園はそんなIS使用者を育てる学校らしいです。

どうして僕がここにいるかと言うと、

誰かにお弁当を届けに来たとか、

散歩してたら通りかかったとかじゃありません。

え？ 生徒なのかって？ ……い、一応今日からそうですけど、

僕……男ですよ？

えー……嘘付くなって？ 女だろって？ 男がISの学校に来た理由？

あんまり性別の事は触れないでください。中学の時も大変だったんです。

あ、えっと理由でしたね。それが……僕、動かしちゃったんです。IS。

あれは中学卒業を控える寒い時期。

幼い頃に両親に捨てられて、お姉ちゃんと二人暮らし、

千冬お姉ちゃんに養ってもらってて、

家事とかマッサージとかだけで恩を返してるのも申し訳なくて、

学費が安くて就職率が高い学校【あいえつ藍越学園】を受験したんです。

ですけど……。



「受験者ね？　その部屋で着替えて準備して。時間ないから早くね」

そんな！　着替えなんて持ってきてないよ！？

試験は着替えて行うものだったのか！　うわゝ何もないよゝ。

試験官さんは忙しいのかコチヲを一度も見えてくれない。

声もかけづらいし……。

仕方なく、言われた部屋に入るとボヤッと優しい光を放つ機械がある。

あゝテレビで見た事がある。ISだ。

僕は何気なく触れてしまう。すると、膨大な情報が頭の中に染み込んでいく。

「あー！　勉強したこと忘れちゃう！！　止めて止めて！！」

しかし、止まることも無く、僕の身体はISに包まれていた。何でさ？

ISの動かし方が分かる。一応勉強したことも覚えてる。でも……

「僕 男なんですけど!？」

そう、女性にしか使用できないはずのISは僕が意識したとおりに動きます。

ガチャ

「準備できた? はいじゃあコツチね」

「あ、いや、あの……僕、その……」

「ボクっ娘!? うわ、良いわね。キャラ立ってるわね。はい、そこを左」

おお!? 良く分からないけど高評価!? 試験受かる!?

そんな違う事を考えつつ、僕はグイグイ押されて……。

『じゃあ試験開始しますよ?』

「へ?」

『試験官の山田って言います。適性を見るだけだから撃墜されても気にしないで普段通りに落ち着いてやってね?』

「へ?」

適性試験？　ISで？　あれ？　何で普通の学校でIS使うの？

『ではレディ〜GO〜♪』

「うわわわわっ！」

頭の中は筆記試験でいっぱいだった。

でも迫って来る試験官さんのIS、撃って来る砲撃もかわし、落ちていて……

「落ち着けないー！！」

『あらあら、凄く早いですね〜。少し待って下さいね〜。じゃあ少し適正レベルを上げて〜……（ピッピッピッピッ……）』

どうしたら良いか？

何か設定を弄っている試験官さんを見ながら深呼吸をする。

「落ち着け〜。夢じゃない。とりあえず分かんないけど撃墜されても試験に落ちる訳じゃないらしい。でもこれが終わったら筆記試験だろうから撃墜されると、IS特集のテレビを見る限り、体力的に辛そうだ。そんなんじゃ試験中に眠っちゃうよ……って事は、逆に落すのが早い！　武器、武器は？」

独り言を呟きながら冷静になり今の状況、打開策を考える。

【近…近接戦闘用ブレード】

【中…アサルトライフル…試験により使用制限】

【遠…ミサイルポッド…試験により使用制限】

刀が一本。……試験官さん撃って来ましたけど!?

『では行きますよ〜♪』

「いいっ!? や、やるしかない!」

先ほどの様に突撃して来ない試験官さんは距離を取る。

そして……。

『避けられますかね〜?』

どばっ

眼の前に広がる鉄の細い棒。棒の後ろの方には火が付いているみたいで、

近づいて来るにつれて細い棒は太く見えてくる。ちなみに目算で8本。

「み、ミサイル〜!?!」

『おお! 凄いです凄いです〜!』

「くっぬっ……いりゃあ!……ケホツケホツ……あゝ危なかった〜」

何とかミサイルを避けきり、斬りおとした僕は爆風に咳き込んだ。

『はい、良く出来ました。でもここまでですね』

そう言って遠くにいたはずの試験官さんは、

超高速で接近して来て薙刀を振り下ろしてきた。

でも、僕はその薙刀をかわした。

『あ、あら……?』

試験官さんは僕に触れることなく空振りし、

勢い余って壁に激突しダウンした。

『ふ、ふぎゅう……（カクン）』

「……えいつ（カツンッ）」

ピピッ

【試験官機撃墜。お疲れさまでした】

そのメッセージを見て、僕はさっきの部屋に戻った。



で、戻ったら警備員さんとか先生とかに取り押さえられて、

「あなたは誰!？」って……その時やっと気付いたんです。

ああ、試験会場間違えてたんだって……。

どっかで間違えて【あいえずIS学園】の試験会場に入っちゃったんだ。

そこで中学の生徒手帳とかでやっと僕が男だって分かってもらえて、

「男!？」って大騒ぎになって。

しばらくは自宅謹慎みたいな感じにもなって大変だった。

そして、少し前に久々に帰って来たお姉ちゃんが入学手続きを済ませていて……。

【2週間前の事】

ポシャ

頭の上に薄いビニールに包まれた衣服が置かれる。

「あ、お姉ちゃん帰ってたの?」

「そりゃ帰って来る。私の家だからな」

「コレって何？」

「IS学園の制服だ。入学手続きも終わったぞ」

「え……あ、藍越学園受け直したんだよ！？ 合格通知も来たのに！」

「ISに乗れる世界で唯一の男。実験動物で研究所にぶち込まれるのとどっちがいい？ あそこならどこの国も手出しできない。とりあえず3年間は身の安全は保証される」

「あ、ありがとうございます……うう」

「ふふ、そう気を落とすな。初の男子生徒と言う事で学費はほぼ特待生扱いになってタダになったわけだし、IS学園も普通の高校と大差ない。充実した学園生活を送れるかどうかはお前次第だ」

「うーん。別に充実しなくても、」

「すぐに働いてお姉ちゃんの助けになればソレで良いんだけどな。」

という訳で、今日からこのIS学園で勉強に励むことになりました。でも、世界で唯一ISを使える男って事で、知らない人たちに囲まれるのが眼に見えるようで嫌だった。……そのはずだったけど、やっぱりどーでもいいのかな？

誰もその事に触れて来ない……。

空気を読んでくれて助かるよ。IS学園サイコー！

シューーンッ

教室の自動ドアが開く。

そこには僕達とは違う私服の人が入って来る。

「皆さん入学おめでとう。私は副担任の山田真耶^{やまだ まや}です。今日から皆さんはこのIS学園の生徒です。この学園は全寮制。学校でも放課後も一緒です。仲良く助け合って楽しい3年間にしましょうね」

うんうん。周りは女の子だけしかないけど。

僕が男だと言う事には不干渉の暗黙のルールが敷かれてるみたいだ。

「先生質問でーす」

女の子の一人が手を上げる。

ああ、

「先生恋人はいるんですかー？」

「あはははは〜♪」

「うふふふふ〜♪」

なーんて初々しい感じの質問から僕の学園生活が始まるんだな。

「噂の男の子はウチのクラスだって聞いたんですけど？ デマですか？」

うんうん……うん？

「え、えっとそれなら私の目の前に……」

山田先生の声に視線を一斉に浴びた。……気がする。

僕は一番前の席で真ん中だから怖くて後ろを見ることも出来ないけど。

……（ぞわっ）やっぱりすごい見られてる気がする！

「やっぱりそうだったんだよ！ ホラ！ 一人だけズボンじゃん！」

チクッ チクチクッ

「えー！ だって女の子にしか見えないよ！？」

グサッ

「どっからどー見ても女の子だよね！？ 髪すごく長いし」

グサ！ グサグサグサッ！

言葉という凶器が僕を貫いて行く。

「ひ、酷いよ……」

「ああ、お、織斑君？ 気を落とさずに……ね？ そ、そうだわ。自己紹介から始めましょうか。えっと、出席番号順で……あ、ちようど良いわね。織斑君から始めましょうか」

自己紹介？

そうだ！ ここでちゃんと男ですって言えば誤解されなくてすむよね？

ガタッ

「えっと、僕は織斑一夏です！ 友達は『いっちゃん』とか『一夏』って呼びます。見ての通り正真正銘の男です。よろしくお願いします！」

「えー……正真正銘女の子だと思ったのに」

「いっちゃんって……ね」

「見ての通りじゃないよね」

ダンッ！

銃弾にも撃ち抜かれた。

シューーンッ

「貴様らは学友の自己紹介もまともに聞けんのか！」

「え!?! 千冬お姉ちゃん!?!」

ぺしっ

「いたっ……えー……?」

額にデコピンを受ける。額を擦りながら僕は千冬お姉ちゃんを見つめる。

「学校では『織斑先生』だ」

「先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

何故にここに千冬お姉ちゃんがいるのか?

職業不詳で、月に1、2回しか帰って来ない実の姉が……?

「諸君! 私が担任の織斑千冬だ! 君達新人を1年で使い物にするのが仕事だ」

「「「「「キヤアアアアアアアッ!」」」」」

「千冬様! 本物の千冬様よ!」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです! 北九州から!」

「私! お姉さまの為なら死ねますっ!」

「お姉さま! もっと叱って罵ってえ!」

「でも時には優しくして〜!」

「そして、つけ上がらないように躑をしてゝ！」

凄い大騒ぎになってる！？ お姉ちゃん凄く人気あるんだな……。

「毎年よくこれだけバカ者が集まるものだ。私のクラスにだけ集中させてるのか？」

若者？ バカ者？

お姉ちゃんは誰に聞こえるでもなく、頭を抱えてそう呟いた。

「え？ じゃあ織斑クンって千冬様の弟？」

「それじゃあ世界で唯一ISが使えるって言うのも何か関係が……？」

「静かに！ 諸君らにはこれからISの基礎知識を半年で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませろ。良いか？ 良いなら返事をしろ。良くななくても返事をしろ！」

「「「「はいっ！」「」「」」」

僕のお姉ちゃん。織斑千冬は第一世代IS操縦者の元日本代表です。ある日突然引退して姿を消しちゃったんだけど……。

学校の先生やってたんだ……心配いらなかったんだね。

気を取り直して副担任の山田先生が説明を始める。

と言っても、誰もが知っている説明だった。

ISは10年ぐらい前は宇宙で使うスーツとして開発されていたけど、

今は競技種目とかのスポーツとして使用するモノ。

アラスカ条約とかで軍事利用も出来ないようになってる。

で、このIS学園は世界で唯一のIS操縦者の教育機関。

世界中から沢山の生徒が来てる。

IS操縦から製造まで幅広い留学生も多い。

唯一分からないのは、僕が使えると言う事だ。

だって、僕は男だよ？ え、見えない？ 冗談だよね？ ……え？

第01話「織斑一夏は男の娘？」（後書き）

感想は随時受付します。

アイディア・ネタ等も随時募集。

みんなで面白くして行こう！

……作者の力量次第なんですけどね。orz

えゝ小説紹介に書いたのですが、基本的には一夏が【男の娘】に変化しただけで原作通りに大体進んでいくと思われま

オリジナルも多少は入れて行きますが、過度な期待は落ち込んだ時に「へっ、その程度だったか」と落胆しますのでそれなりの気持ちで読んでね♪

フリスタの他作品を読んで頂いた事がある方なら分かるかと思いますが、彼は基本的^{フリスタ}にギャグに走ります。シリアスを求めてきたなら爆死します。逃げて下さい。

どこまで書けるんだろう？

第02話「男の娘に逃げ場無し」(前書き)

現実には敵だ。

と言う訳で仕事の所為で投稿が遅れました。

第2話です。結局サブタイ変更。うんアレは3話だな。

と言うか、こんなに感想貰ってすごく嬉しいです。もっと下さい！
と、遠慮なく進めて行きます。

第02話「男の娘に逃げ場無し」

とりあえず授業が終わって束の間の自由時間。

誰も知ってる人いないよね……そう思っていたのはこの教室に入る前の事。クラスに入ると昔の印象が蘇える女の子がいた。僕の二つ左の席だ。あの子の名前は篠ノ之箒^{ほうき}。子供の頃良く遊んだなあ。髪形が変わってないからすぐに分かったよ。ふふふ。

しかし、そんな風に過去を振り返る余裕なんてモノはなく……。

ギラギラした視線を浴びては、背筋をピンっと張り逃げ場を探すけど……男友達もいるわけなので……人類^{ボク}に逃げ場なし！

ああウチのクラスだけじゃなくて、他のクラスの人も見に来てるう……誰だ！ 『空気を読んでくれて助かるよ。IS学園サイコー！』なんて考えてたのは……なんて数10分前の自分を責めても状況は変わることは無い。

ああ、噂話なら聞こえないようにして下さい……。

「あの子よ、世界で唯一ISを使える男性って！」

「入試の時にISを動かしちゃったんだってね？」

「世界的な大ニュースだったわよね」

「やっぱりこの学園に入って来たんだ」

「あなた話しかけなさいよ」

「私行っちゃおうかしらあ」

「待ってよ、まさか抜け駆けする気じゃないでしょうね！？」

「あくでもしょうがないんじゃない？ アレは飼いたくなるわよ」

「IS動かしたのも本当は女の子だったのかもね」

「え！？　じゃあ何で男子の制服なんて作ったの？」

「共学とか？」

「IS学園なんだからISを使用できない人は意味無いんじゃない？」

「うーん……まあいずれにしても」

「「「「アレは飼いたくなる♪（じゅるりっ）」」」」」

飼う！？　何か生々しい音も聞こえた！？

だ、誰かこの状況を助けて……。

と、頭を抱える状況を救ってくれたのは、先ほど紹介した^{ほうぎ}箒様！

少し機嫌が悪そうな感じだけど……。

「ちょっといいか？」

「う、うん。うんうんうん！」

さあ行こうすぐ行こう！　戦略的撤退作戦を図ってください司令官殿！

連れて来られたのは人気のない1年校舎の屋上。2年生、3年生の屋上も見えるが人はいなさそうだ。助かった……。

ガシッと箒の手を掴みぶんぶんと上下に振り、勢いに任せて思いの丈を語った。

「ありがとう！ 助かったよ箒！ 僕はねさっきまで怖かった！ 本っ当くに助けてくれてありがとう！ そう言えば去年の剣道全国大会優勝おめでとう！ 新聞で見たよ！ あ、前後しちゃってごめん！ 久しぶり！ 6年ぶり！ 元気だった！？ 髪形も変わっていないからすぐに分かったよ！ 箒最高！」

「お、落ち着け！ 変わっていないのはお前だ！ 髪が伸びた以外は少しも変わってないじゃないか！！！」

「むっ、そんなこと無いもん！ 箒と会わなくなってだから……身長は15センチも伸びたもん！ 箒なんて僕よりすごく大きくなって……ずるいよ！！！」

「な、好きで大きくなったわけではない！！ それに9歳とかの話しだろう！？ 最低でもプラス10センチ以上は伸びていいはずだ！！！」

ガーンッ！！

す、好きで大きくなって……ない？ 僕が背を伸ばすためにしている努力を……。もう10センチ……？

「お、おい？ ……しかしよくも覚えていたものだな……？」

「うう……忘れるわけないでしょ？ 幼馴染なんだから……大きくなくても忘れないもん……」

「そ、そうか……」

「んう？」

箒は何故か顔を赤らめてもじもじしている。お手洗い？

キンコンカンカーンコン♪

「ああ、予鈴か戻ろう」

「いいよ。僕はもう少し身長についてお空の神様と話し合いをしない……」

「行くぞ！」

ズルズルズル……

ああ、神様。僕の話も聞いてくれないのですね。

んで、また授業が始まる。

千冬お姉ちゃんは監督しているだけだ。

基本的には山田先生が授業を進めて行く。

「―――では、ここまでで質問のある人」

ふふふ、分かる！ 分かるぞ！！
僕が理解できていない！ ということが分かる！

このアクティブなんちゃら〜とか！ 広域なんとか〜って何！？
まさか全部覚ええないといけないの！？

「織斑君何かありますか？

質問があったら聞いて下さいね？ 何せ私は先生ですから」

「せ、先生……」

「はい！ 織斑君♪」

「ほとんど全部分かりませえん（涙）」

「うえゝ……ぜ、全部ですか？

今の段階で分からないって言う人はどれぐらいいますか？」

僕を除くクラスの全員が「理解しています」と言わんばかりに誰も手を上げたりせず沈黙を回答とする。マジですか？ そんなにハイレベルなの？

ああ、僕はこの世界のオンリーワンになれたんだ……。

「織斑。入学前の参考書は読んだか？ 必読と書いてあったはずだぞ？」

ひいっ！ 千冬お姉ちゃんが起動した！？

入学前の参考書？ 確か分厚いやつで……中学の教科書とかと一緒に……。

「いやあ……間違って捨てました」

ぺちんっ

「あ痛っ……（さすりさすり）」

「後で再発行してやるから、一週間以内で覚えろ。良いな？」

「は、はい……（あの厚さを一週間か……）」

「時間があるときは見てやる。今はとりあえず授業を聞け」

「で、では授業を続けます。テキストの12ページを開いてください——」

授業が終わり、また束の間の自由時間です。

んうゝ。あの厚さを1週間かゝ。まあどうにかなるかな。

でも、お姉ちゃんに時間の余裕なんて無いだろうな。家に帰ってくるのも月に1、2回だったんだから今の先生の仕事はかなり忙しいんだろう。これは自分で頑張らないとね。迷惑はかけられない。

「ちょっとよろしくて？」

お嬢様のな口調で後ろから声をかけられる。

「んえ？」

「まあ！ なんですのそのお返事！ 私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、ソレ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

「光栄です〜ファンだったんですよ。で、えーと……誰ですか？ さっきの自己紹介もまともに聞いてなくて……」

「馬鹿にしていますの！？ 私を知らない！？ セシリア・オルコツトを！？ イギリスの代表候補生にして入試主席のこの私を！？」

「あ、う、えっと……ごめんなさい」

なんだか面倒くさい感じのお嬢様だね……。でも主席だから頭はすごく良いんだろう。あ、もしかしてクラスに馴染めない僕を助けてようとしてくれる！？ さっきの授業も分からない僕に教えてくれるようにしてる！？ なら良い人じゃないか！！

それに代表候補生ってアレでしょ？ 千冬お姉ちゃんが日本代表だったから。このセシリアさんはイギリスの代表の候補でエリートさん！！ なんかこの人の背景に薔薇の花びらが見えたりするけど……。

「――」。大体、何も知らずに良くこの学園に入れましたわね？ 唯一男でISを操縦出来ると聞いていましたけど、期待はずれです

わね。見た目も男性では無いようですし」

いや、僕に期待しても何も出て来ないと思うけど……。
それに容姿は関係ないじゃないか……。

「まあでも、私は優秀ですから？ あなたの様な人間にも優しくしてあげますわよ？ 分からない事があれば、泣いて頼まれれば教えてあげない事も無くてよ？」

泣かないと教えてくれないのか……目薬が必要なのかな？

「――何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから？」

「あ、僕も倒した。一緒に仲間仲間♪」

「はあっ!？」

倒したって言うか……逃げ回って、
壁に激突した試験官さんがノビてるところをコッソリとしたただけだけど。

「わ、私だけだと聞いていましたが……あなたっ！ あなたも教官を倒したって言うの!？」

「え？ うん。一応……だから仲間なか……」

「冗談じゃありませんわっ！」

キーンコーンカーンコーン♪

「話の続きはまた改めて！　良いですわね！！」

えー……？

日は暮れて、今日と言う日が終わる。今日から住むことになる寮に向かうのだが、後ろにぞろぞろと女子の皆さんがいる。

先に行かせようと思い少しペースを落とすと、あちらもペースを落とす。

もう少し距離を取ろうとペースを上げると、あちらもペースを上げる。

こだまでしょうか？　いいえ、誰でも。

と、監視されているのか何なのか分からないけど、凄く見られてます。中学の時みたいにストーカー的なモノがなければいいけど……女子とは言え、仲良く話せるなら良いよ？　でもさ、これはちよつと辛いね……。

ほお〜。綺麗な部屋〜。ベッドもフカフカ〜。
でも、ベッドがもう一つあるって事は……。

いや、まさかね。ないない。高校生にもなって男女同室で住まわせるとかありえない。ここだけが今の僕の逃げ場所になりそ……。

ガチャ

「ああ、こんな恰好で済まない。シャワーを先に使わせてもらったぞ？ 私はルームメイトの篠ノ之箒だよろしく頼……なっ！ い、一夏!？」

「ありえないー!!」

「一夏！ 貴様っ！ 女子の部屋に侵入するとは遂に変態になり下がったか!!」

「遂について何!? 僕もこの部屋だって!!」

箒の繰り出す木刀を避け続ける僕。数分間避け続けると、箒は息を切らし始めた。

「くっ、避ける事だけは一人前だな……本当に同室なのか？」

「そうだって。ホラ僕が貰った部屋番号……コレ」

「間違いではなさそうだな……。その……お、お、お前から頼

んだのか？ 私と同じ部屋にして欲しいと？」

「え？ 無理でしょ？ 箒がこの学園にいるのも今日初めて知ったんだから」

「む、無理とはなんだー！！」

「うわっ！ 危ない！ 当たったら危険が危ない！ 顔が怖い！！」

次の日の事です。事件は起こったんです。姉さん事件です。と言うかその事件の発端を千冬お姉ちゃんが語りだします。

「これより、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

えーと、クラス代表者と言うのはこの『対抗戦』と言うモノだけでなく、生徒会の会議や委員会の出席など、クラス長みたいなモノと同じような役割もあるらしい。

「自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

あーこう言うのって誰もやりたがらないよね？
まあ僕も静観させてもらおう。男一人で肩身狭いですしね。

「はい。織斑きゅんを推薦します」

きゅん？ 噛んだのか？ ……ってちよっと！？

「私もそれが良いと思います！」

「んえ！？ 僕！？ ちよっと待ってよ！！！」

「他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ？」

お姉ちゃんまで！？ 人類^{ボク}にやっぱり逃げ場無し！？

バンツ！

「納得がいきませんわ！ その様な選出は認められません！」

「そ、そーだそーだ！ 人権もあるぞー！」

ぺちんっ

「黙って聞いてやれ」

（さすりさすり）……うん、逃げ場無し。

セシリアさん頑張って！！ 千冬お姉ちゃんを説得して！！

「男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ」

そーだそーだ！

ISは元々は女性しか使えないんだから女性が代表であるべきだー！

「このセシリア・オルコットにその様な屈辱を1年間味わえと仰るのですか？」

プライドもあるよ。良いよ良いよ！ その調子！

「大体！ 男だか女だかもハッキリしない様な方が代表と言う事自体が！！」

「ちよっ！ 僕は男！ 男だってば！！」

「あなたは口を挟まないで下さる！？ 大体！ それに文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体耐え難い苦痛で……！！」

「僕の話じゃなかったの！？ それにイギリスだって同じ様な感じでしょ！？ ご飯だって美味しくないって聞くし！」

「美味しい料理は沢山ありますわ！ あなたっ！ 私の祖国を侮辱しますの！？ ……決闘ですわ！！」

あ、あれ？ 何でこうなっちゃった！？
今からでも遅くない謝ろう。それで万事解決だよね……。

「話はまとまったな？ それでは勝負は次の月曜、第3アリーナで行う」

「まとまっ
てない！ ま
とまっ
てな……！」

キラ
ンッ

「ま、まと
まりました
っけかね。あ
ははは……」

ああ、セシ
リアさんは怒
ってて、わ
ざと負け
れば奴隷
って言っ
てるし、え
ー……。

第02話「男の娘に逃げ場無し」(後書き)

感想は随時受付中です。

主人公設定も少し見直します。

次回のタイトルこそ「クラス代表者は男の娘」になるかと思っています。
では、また次回。

第03話「クラス代表者は男の娘」(前書き)

原作との大きな違いが生まれます。

それは、いつちゃんのISです。

いえいえ、白式ですよ？　ですけどね……。

では第3話です。どーぞ。

第03話「クラス代表者は男の娘」

春の陽気に誘われて、少し眠気を残しつつ授業に励もうとしますが、今の最大の問題は授業が分かる分からないとかではなく……いや、まあ多少はそれもあるのですが、後ろの方に席を構えるセシリアさんの方が今は問題です。

何故って？ そりゃあ次の月曜日にISで僕と戦うからだよ。本気でやらないと奴隷にされちゃうらしいし、もし勝つことがあったとしてもクラス代表とか言う面倒臭そうなモノにされてしまう。席についている時は、そんなセシリアさんからの視線が感じられるほどに痛い。ロックオンされてます。

そこで僕が考えたのは、「機体ってどうなってるのよ？」ってことです。訓練用に使っているのを貸し出されるんだろうけど、例えばそれが事故とかで貸し出し不可になれば戦う事も出来なくなるはずだ。でも壊すと大問題だしな……でもどうにかして「乗れないなら仕方ないね」の方向に持って行きたかったのです。それが一番平和。そう思っていたんですけどね……。

キンコンカンコンコン♪

S H Rが始まる。

少しざわつくクラスを咳払い一つで沈めた千冬お姉ちゃんは続け様にこう言った。

「織斑。お前のI Sだが、

準備まで時間がかかるぞ、次の月曜日までには間に合わない」

……それって僕が望んでいた事じゃないか！ イエッス！！

ぺちっ

「小さくガッツポーズを取るな。話は最後まで聞け」

さすりさすり……。

まだあるんですか？

「予備の機体が無い。だから学園で専用機を用意するそうだ」

「専用機？ 1年のこの時期に？」

「つまりそれって、政府から支援が出るって事？」

「凄いなあ〜私も早く専用機欲しいなあ〜」

専用機？ 後ろからさわさわと聞こえてくる話から察するに、政府からお金とかが出て僕専用のI Sを用意してくれるみたいだ。で、それは普通こんな時期には話として出てくることは無いようだ。

あれかな？ テレビとか漫画で出てくるような、赤かったり、3倍早く動けたりするやつかな！？ シャアかな？ ジョニー・ライデンかな？ 何て喜んでる場合じゃない。僕なんかに国の予算を使うって何を考えてるんですか国は！！

「それを聞いて安心しましたわ!!」

「うわあっ！　せ、セシリアさん……」

僕に指をビシッと突き出して、セシリアさんは続ける。

「流石に私が専用機、あなたは訓練機ではフェアではありませんもののね」

セシリアさんは専用機を持っているらしい。でも不思議じゃないよね。代表候補生ってやつなんでしょ？　ん？　いや、それでも専用機って凄いのか？　専用機なんてある意味一人に1機とかでしょ？

「織斑きゅん。専用機って言うのはね、世界に467機しかないの。コアと呼ばれる技術は一切公開されてないの。今世界にある467機のコアは全て篠ノ之束博士たばねが作成したモノなのよ」

きゅん？　……か、解説ありがとう。専用機ってそんなに少ないんだ。て言うか、束さんって筈のお姉ちゃんだよな？　筈さーん。って、窓の外見てるし……。

「ISのコアって完全なブラックボックスなんだって。篠ノ之博士以外は誰もコアを作れないんだから」

「でも博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しているの」

「国家・企業・組織機関では、割り振られたコアを使用して研究・開発訓練を行うしかない状況なんだよ」

へ……と、みんなが説明してくれる事を頭に入れて行く。そんな重要なモノを何で僕が？ その疑問を千冬お姉ちゃんがキツイ目で説明する。

「本来なら専用機は国家・企業に所属する人間にしか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意される。理解できたか？」

よく言えばモルモット。悪く言えばモルモットだね。
あの時、試験会場を間違えてなければ……。

山田先生の授業が始まる。分厚い本は捨ててしまっただけで理解出来ない部分が多いけど、とても易しめなので何とか理解しようとしている。

「IS。インフィニットストラトスは、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアで包んでいます。ISには意識に似たようなものがあるって、お互いの対話、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うと言うか、操縦時間に比例してIS側も操縦者の特性を理解しようとしています」

ほほ……。すごいねIS。がんばり屋さんなんだ。

「ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識して下さい。ここまでで質問のある人は？」

「質問！ それって、織斑きゅんに接するようにしていれば大丈夫って事ですか？」

どう言う事さ。何？ 虐め？ 男子を追い出そうと言う虐め？

「そうですね……はい。間違っでは無いと思います」

先生も合わせて！？

しかし、操縦時間に比例して……か。

つまり、乗れば乗るほど使いやすくなっていくって事だね。じゃあ専用機を既に所持しているセシリアさんと僕とだとかかなりの差があるんじゃないかな？

昼ごはんの時間です。ここのご飯は寮と同じでとても美味しい。最高だね！ それはさておき、ISが無いとはいえ、ISをある程度知っておく必要がありそうだよね。

「と言う訳で……箒！ 箒！」

「名前で呼ぶな！ なんだ？」

「ISの事教えて。ごはん食べながらも良いからさ。ね？ ね？」

「知らん。くだらない挑発に乗るからそう言う事になるんだ」

そう言って箒に視線を外されてしまった。

「織斑きゅん。お昼一緒に食べない？」

「専用機は無いけど相談に乗れるよ♪」

「入学前の参考書捨てちゃったんでしょ？」

「た、助かるよ!! (ガシッ) うえっ!？」

身体が浮いてる浮いてる!

「大丈夫だ。私が教える」

「篠ノ之さん!？」

「あゝ篠ノ之博士の妹さんならね……」

「う、うん。失礼しました……」

そう言って3人組の女子は行ってしまふ。

「ほ、箒? 教えてくれるの？」

僕は後ろ襟を掴まれたまま反転させられて正面を箒の方に向けられる。

「……ふん」

バシィンッ!

「危ない！ 何で！？ 僕なんで剣道してんの！？」

「避けるだけでは相手に勝つことも出来ないではないか！！」

僕は箒の竹刀をかわし、受け流し逃げ回る。

「そんな避け方は剣道には無いぞ！！ 基本がなって無い！！」

「僕が教えて欲しいのはI S！ 剣道はいいから！！ わつとと！」

「ねえ、何であの二人剣道やってるの？」

「さ、さあ……」

「ほら、アレじゃない？ I Sに必要なんじゃないの？ 心構えとか」

少ないけども必ずいると言っても良い観衆。

何故、剣道をやるのか？ その先にI Sがあるからです。と言う事らしい。

なるほど。そう言う事……か？

結局1週間ほど、ずっとこればかり。

I Sの知識は……うん。知らないってことだね。多分。

でも、やるからには負けたくない。

だって僕は男の子！

【Side 箒】

まさか逃げるだけとは……。
あれだけ打ち込んでいた剣道を辞めてしまうとは……いや6年も経ったんだ。変わらない方がおかしいか。

「髪形も変わってないからすぐに分かったよ！」

よく覚えているものだ……。
全く、あんなに軽く……。
アレほど可愛いままで……。

はっ！ いかんいかん！
変わっているのか変わっていないのか分からないではないか！！
男子たるものやはり鍛え直さねば！
そうだ。私は同門の不出来を嘆いているだけだ！
何もおかしい事はない！

【Side out】

——決戦当日。

「ねえねえ箒」

「何だ？」

「元々はISの事を教えてくれるって話じゃなかった…… あ、目逸らした」

「し、仕方ないだろう。お前の機体はまだ届いてないんだから」

「でもさ でもさ。事前の予備知識とか……あ、また目逸らした」

「うるさい！」

えー……。

結局、剣道だけで逃げ回ることしかしてなかったような……？

『織斑君。届きましたよ。織斑君の専用IS【びやくしき白式】です！』

『織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番でモノにしろ』

えー……。

「準備が間に合いませんでした」
とかで試合を無しとかに……出来ないね。はあ……。

僕はISスーツに着替えて、またISのところに戻ってきた。

ISに触れるとあの時、入学試験の時とは違う感覚だけど、ゆっくりと同調して行くのがわかる。

『織斑、すぐに装着しろ。

時間が無いからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ』

んな無茶苦茶な……そのフォーマットとフィッティングって言うのがどう言う事かも良く分からないけど、凄く重要なんじゃないだろうか？

『背中を預ける様に。そうだ、座る感じで良い。後はシステムが最適化してくれる』

ISが身体に取り付けられるように装着されて行く。

<Access>

視覚情報が表示されて行く。ああ、こんな感じだった気がする。

『セシリアさんのISは遠距離射撃型【ブルー・ティアーズ】です』

さっきモニターで見てたあれか。つと表示された。

『織斑、気分は悪くないか？ 大丈夫か？』

「大丈夫だよ おね……大丈夫だと思います。織斑先生」

『そうか』

ん？ お姉ちゃん少し笑った？

「箒」

「な、何だ？」

「行って来る」

「あ、ああ勝って来い」

「……うん」

「何だ今の間は！」

だってそれは無理かもしれないじゃん。経験の差が違うでしょ。

僕は白式でアリーナに飛び出す。

空で待ち構えるのはセシリアさんのブルー・ティアーズだ。

「最後のチャンスを上げますわ」

「チャンス？」

「私が一方的な勝利を得るのは自明の理。今ここで謝ると言うのなら許してあげないことも無くってよ？」

「えっ！ 本当！？ あやまr……ん？」

<警告…敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロックの解除を確認>

撃つ気満々！？ 謝っても撃つ気だったのか！？
騙すなんて酷いよ！

「絶対謝らない！！」

「そう、それなら……お別れですわね！！」

<警告…敵IS射撃体勢に移行>

僕は初撃を高速回避した。けど、イメージとは違う距離を移動した。機体に振り回されてる！？ うわっ連射してきた！

「さあ！ 踊り狂いなさい！ 私、セシリア・オルコット と ブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

「うわっ掠った！ 武器はっ！？ これだけか……なんか試験の時

を思い出すな」

近接ブレードが一本のみ。

3ヶ月ぐらい前の入学試験を思い出してしまう。
って思いだしてる場合じゃない!!

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのは
あなたが初めてですわね。褒めて差し上げますわ」

「知らないよそんな事！」

「でも……そろそろフィナーレと参りましょう！」

うわっ！ 4本の単独射撃機が出てきた！
ファンネルだ！ ビットだ！ ファングだ！
でも当たらないよ！だんだん慣れてきたからね。

「♪ ♪♪」

「鼻歌？ ふざけてますの!？」

【Side 管制室】

「ふわゝ凄いですね織斑君。ISの起動が2回目とは思えません」

「ふん。あの馬鹿が、浮かれているな」

「あ、あゝ鼻歌、歌ってますものね」

「あれが出る時は大抵簡単なミスをする」

【Side out】

単独飛行物体を全て切りおとした。

「これで僕の勝ち！」

「かかりましたわね」

——え？

「4機だけとは言ってませんわ！」

「ず、ずるい！！ セシリアさんのズルッ子！！！」

これは避けきれない！！

スラスターと思っていた下に向いている筒は向きを変え、砲身となった。

ミサイルが2発。これは……終わりか？

ピピッ

……んう？

ズガンッ！！

<フォーマット・フィッティング完了>

「お？ おお〜？」

「な、なあ……まさかファースト・シフト！？ あ、あなた 今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

「よく分からないけど。そうらしいよ？」

『よろしくお願いしますね。マイ・マスター♪』

「ISが喋った！？」

『そりゃ喋りますよ。パートナーなんですから♪』

そう言うものだったのか……。

「な、何を一人で言ってますの！？」

あれ？ セシリアさんには聞こえてないって事は……。そう言うモノじゃない？

「ISには意識に似たようなものがあって、お互いの対話、つまり

一緒に過ごした時間で分かり合うと言うか、操縦時間に比例してI
S側も操縦者の特性を理解しようとしそうです……」

「意識に似たモノ？」

『【白式】ですマスター。』

近接特化ブレード。雪片式型が使用可能になりました』

雪片って、千冬お姉ちゃんが使ってた武器だよね？

お姉ちゃんと同じ武器か……えへへへ。

「な、何をニヤニヤしてますの！！ まだ終わってませんわ！！」

『来ますマスター。近接ブレードでミサイルを斬り払った後、接近。
式型に切り替えて斬り倒すのが良いかと思われます』

「ほうほう……それで行こう！」

「あっ！？」

プアアアアアアンッ！

『勝者、織斑一夏！』

【Side セシリア】

……。

私と同じく試験教管を倒していた人物で女のようにしか見えない男。何の知識もなさそうな男が、専用機さえも知らなかった男が、初期設定の状態で、あそこまで綺麗にかわして、それでも私は「踊りなさい」等と浮かれていたなんて……。ファースト・シフト後からの圧倒的な高速機動。私の方がISに乗っている時間も圧倒的に長いと言うのに、それなのに圧倒的な差……。

これは恥ずかしいと言う気持ちだけではありませんわ。

何故この様な気持ちになるのかしら？

「絶対謝らない!!」

あの強い眼差し……。

「織斑……一夏……」

【Side out】

どうしよう。勝っちゃった……。

「あ、あの織斑先生。織斑君が勝ったはずなのに呆然としてますけ

ど？」

「ああ、アレは子供の頃に剣道をやっていてな。辞めてからは勝負事は避けて逃げる様になった。また、クラス代表の様な事も避ける様な思考も持っているだろうな。なあに、やり始めれば責任は持つようになる」

「一夏！ 勝ったんだから喜べ！ 凄いことだぞ！」

「ああ、うん。そうね……そうだ！ セシリアさんにクラス代表任せちゃえば良いんじゃない！？ やりたがってたしね！！ そうだ、それが一番平和的解け……」

「辞退は許さんぞ？」

……みんなが虐める。

『元気出して行きましょうマスター。私がついてますから』

「ありがとう白式……」

「お、織斑先生？ 織斑君が腕輪のISに話しかけてますよ？」

「……疲れているんだろう。そっとしておいてやれ」

「一夏……先に部屋に戻っているぞ？」

僕のISの白式は待機状態になっている。

呼び出せばすぐに形態を変化させて、装着出来るらしい。

それにしてもクラス代表か……面倒臭そうだな……。

第03話「クラス代表者は男の娘」（後書き）

感想は随時受付中です。

と言う訳で、原作通りになっている面。
なっていないくて、何コレ？ 的な面が出始めました。

白式さんは喋る！

その方が理解し合ってるって感じがすると思うんです。勝手に。

※今回の萌えポイント。

【身体が浮いてる浮いてる！】

いっちゃんは箒に片腕で持ち上げられるほどに軽い。

（いっちゃんは38キロ設定だから……何とかなるとギャグで考えて下さい）

第04話「男の娘は甘いモノが好き」(前書き)

今回はセカンド幼馴染のリンが出てきます。

うーん。そんだけー。えー……。

第04話「男の娘は甘いモノが好き」

良い天気だなあ……こうも良い天気だと眠りたくなってくるよね。
まあそんな訳にも行かず、クラスのみんなは僕を含めてISスーツに着替えてグラウンドに集合している。

あ、猫だ……。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦をしてもらう。織斑、オルコット、試しに飛んでみろ」

「分かりましたわ！」

「んえ？ 飛ぶ？」

『ISで飛ぶんですよマスター』

ああ、なるほどね。

セシリアさんはISを起動させて飛ぶ準備万端だ。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

「そうなんだ。じゃあ白式お願い出来る？」

『了解ですマスター』

「また独り言か……。昨日の疲れが取れてないのか？ 問題がある

ようなら精密検査を予約しておけ」

「問題ないです」

『マスター。私は基本的にマスターがイメージして頂ければスピードも上げられますのでお願いします。飛ぶ時や防御の時は基本的にイメージするだけで構いません』

イメージね……。飛ぶイメージ？ 普段、飛ぶなんて事は有り得ないから分かり辛いけど、確か授業の内容だと、自分の前方に角錐をイメージするとか言ってたね。分かりやすい感じだと、自分の前方にパラソルチョコがあると思えば良いんだよね？

「問題ないなら良いが……。では、飛べ！」

「「はい！」」

「パラソルチョコパラソルチョコ……。こんな感じかな？ あ！ お菓子とかがあると思えば制限無しで良いのかも！？ それなら！ それなら！ んーとんーと！ イチゴパフェくきな粉餅く練乳カキ氷く……」

『良い感じですよマスター』

「やっぱり早いですわ！ そ、その…宜しければ、放課後などに二人きりで練習をしてみませんか？」

「ん？ 何か言った？ 今は甘いモノで頭いっぱいなんだけど？」

『マスターと一緒に練習したいらしいですよ?』

え……?」

……負けた腹いせに女子の派閥で寄ってたかって虐める気!?

『良いだろう。織斑、オルコット、急降下と完全停止をやってみせろ』

「お、お先にー!!」

『マスターが考えている事はないかと思うんですけどね』

「お、お待ちになって!」

『馬鹿者!! 一緒に急降下するな!!』

ガッンッ!!

「うわっ! 当たってバランスが……!!」

ズガンッ!!

「いたたた……」

『ごめんなさいマスター。チェックの為 待機状態に戻りますね』

出来た穴の上から山田先生と箒と千冬お姉ちゃんが覗きこんでくる。

「大丈夫ですか織斑君!? ほっ、大丈夫そうですね」

「馬鹿者、グラウンドに穴を開けてどうする」

「情けないぞ一夏! 私が教えた事をまだ分かって無いのか!」

うん ごめん。……何を教えてくれたのさ?

「い、一夏さんスミマセン! お怪我はなくて!?!」

「う、うん大丈夫……って“一夏さん”!?!」

セシリアさんが昨日の試合の後から何かおかしい?

さっきはまた違うやり方で虐められると思ったけど……。

「一応 保健室まで一緒に見てもらいませんか?」

「無用だ。ISを装備していて怪我などする訳ないだろう?」

あ、箒。いつの間に穴に^{クレター}下りてきたんだ?

「あら篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然の事でしてよ?」

「お前が言うか、この猫被りめ」

「鬼の皮を被っているよりはマシですわ」

おお…でかるちゃー……。何で目の前の二人は仲が悪いんでしょうか？

銀河の果てまで抱きしめて仲良くすればいいのに。でも僕はシエリル派。

「織斑きゅん！」

「クラス代表決定！ おめでと〜う！」

「」「」「おめでと〜う！！」「」「」

クラッカーの破裂音が鼓膜を通り抜けて行く。

ああ、もう逃げ場はない。クラスメイト達は僕を代表と言う座に縛りつけ、何かにつけて虐めてくるに違いない……。女子の虐めは半端ないらしいからな……。死にたくないな……。

「い、いやあ〜やっぱりセシリアさんの方が代表者に相應しいんじゃないかな〜？ なーんて……」

「初心者であつた一夏さんが私を倒したのですから当然ですわ。一夏さん以外がクラス代表者だなんて有り得ませんわ」

そこまで言いますか。

「まあ負けても唯一の男の娘だもんね〜。持ち上げてクラス代表者に仕立て上げるわよね〜」

さ、最悪だ。男の子だとは言ってくれてるけど、結果はどうであれクラス代表にはさせる気だったんだ。

「人気者だな一夏」

「虐めでしょコレ……はあ」

カシヤツ

おわっ！ 撮られた！？

「はいどーもー新聞部でーす。セシリアちゃんも良いかな？」

「ふ、二人でですか？」

「注目の専用機持ちだからね。あつ、握手とかしていると良いかもね」

「そ、そうですか。」

あ、あの撮った写真は当然 引き伸ばして後で頂けますわよね？」

何故、貰う必要がある？ 何故、引き延ばす必要がある？ 自分が好きなんでしょうか？ まあ好きそうではありますか……。

「そりゃもちろん。さあ立って立って。はい、もっと寄って寄って、緊張しないで」

こ、これ以上寄るの！？

グイッ

わ、わわわ！ 腰に手を！？ わーわーっ！！ ……わ？

カシヤッ

あ、箒が間に入って助けてくれた……。他のクラスメイトさん達も……。

「な、何故全員入ってますの！！」

「あはは」

「セシリアだけ抜け駆けは無いでしょ」

——就寝時間。

「さっきは楽しかったか？」

「な、何だか怖いよ？ あ、でもさっきは助かったよ箒」

「そ、そうか？ そうか……こ、これから寝間着に着換えるからアツチを向いてろ」

「はいはい……ふあ……あふう……」

お祝いのケーキ美味しかったな……く……すう……

【Side 箒】

「さっきは助かったよ箒」

私がいて助かったか。

そうか、そうか。あのように笑顔で感謝するとは。

私は着替えて制服をハンガーにかけて仕切りを戻した。
この新しい帯をみて一夏は何と言ってくれるだろうか？

「ど、どうだ一夏？」

「く……すう……」

……くっ！ 寝顔までこうだと怒れないではないか！！

【Side out】

朝、爽やかな陽気に包まれて、
僕達の1年1組となりのクラスの噂が流れていた。

「もうすぐクラス対抗戦だね」

「2組のクラス代表が変更になったって聞いている?」

「あゝナントカって転校生に変わったのよね?」

ナン・トカさん? 留学生か……強いのかな? でもこの時期に転校生って言うのも不思議な話だね。ついこの間、入学したばかりなのね。

「中国から来た子らしいよ?」

「今のところ専用機を持ってるのってウチと4組だけだから余裕だよ」

「その情報古いよ」

ん?

「2組も専用機持ちのクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから」

「あ、鈴^{リン}? 鈴じゃない!??」

この少女は凰^{フアン} 鈴音^{リンイン}。僕の幼馴染の2ndシーズンだ。

ちなみに箒が1stシーズンです。箒が小学校4年生の頃に転校しちゃって、鈴とはそれから出会ったんだ。中学2年生の時に引越しちゃったから2年ぶりぐらいになるのかな?

「し、知り合いなのですか一夏さん?」

「うん、僕と同じ身長の……大きくなって！？ 何やったの！？ 悪魔に魂でも売ったの！？ どこで売れるの！？ 僕も寿命の5分の……ん、んゝ半分までなら……！」

「誰が売るかー！ アンタ人の話を聞きなさいよ！ 私は中国代表候補生として……！！（ゴスッ！） あっ痛あゝ……何すんの！？ うゝっ！」

あ、もう授業か……。

「もうSHRの時間だぞ？」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ、さっさと戻れ、邪魔だ」

「す、すいません……また後で来るからね！ 逃げないでよ一夏！」

逃げる必要がある事したっけ？

食堂にて。

「さっき代表候補生とか言ってたよね？ いつなったの？」

「アンタこそ、ニュースで見た時ビックリしたじゃない」

本当は藍越学園に行く予定だったんだけどね……。

バンツ！

「一夏！ そろそろ説明して欲しいのだが？」

「そうですわ一夏さん！」

怖い！ 何故か仲良い！？ 仲悪くなかった！？

「ま、まさか ここここ、こちらの方と付き合ってたっしやるの！
」？」

「べ、べっべべ別に私は……」

「ただの幼馴染だよ？ 鈴の家にご飯食べに行ったりするぐらいの
仲だよね？」

あれ？ 少し怒ってる？

「なっ！ 聞いてないぞ一夏！！」

「私もですわ！！」

え？……鈴の実家の中華料理屋にご飯食べに行くぐらいよくない？

まあ辛いモノが多いから大変だったけど……。

「話は放課後のアリーナで聞こう」

「そうですわね」

えー……。

その日はISの練習機を借りてきた箒とセシリアにワケの分からないコンビネーションにてんやわんやで疲れた。白式もメンテナンسدとかで制御とかは初期設定時と同じ感じの普通のオートモードでした。酷い……。

「お疲れ一夏。はいスポーツドリンクとタオル」

「わあ、ありがと。こんな時間まで待っててくれたの？」

「まあね♪ ……やっと二人きりだね。一夏さ……やっぱ私がいないと寂しかった？」

「うん。遊び相手が減って寂しかったよ。あ、そろそろ箒もシャワー終わってるだろうから部屋に戻るね。飲み物ありがと」

「ちょ、ちょっと？ 箒ってさっきの子よね？ どうしてその子がシャワー終わると一夏が部屋に戻るのよ？」

「そりゃあ、同じ部屋だから……あ、僕も最初は困ったんだけどね、幼馴染だから気を使う事も他人に比べれば……」

「どうして同じ部屋なの！？ 日本って異常なの！？」

「んえ？ ああ、そう言う事か。部屋が用意できなかったんだってさ」

「……幼馴染なら良い訳ね？」

「いや、て言うか僕は男だし一人が良いんだけど……」

「幼馴染なら良い訳ね！？」

「人の話聞いてる！？」

「と言う訳で部屋変わって♪」

あゝ……こうなりますか……。

「ふざけるな！ 何故私が！！」

もう寝ようと寝間着に着替え終わっている箒が怒り始める。
さっきまで割と機嫌良かったのに……。

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんて嫌でしょう？」

「べ、別に嫌とは言っていない！ それにこれは私と一夏の問題だ
！」

どんな問題さ……？

「ところで一夏さ、私との約束覚えてる？ 小学校の時に……」

「む、無視するな！ こうなったら……！！」

「わーわーっ！ 箒落ち着いて！ 暴力駄目！！」

竹刀を抜き取った箒を前に出て止める。危ないったらありやしない。
怒りん坊だな……。

「い、一夏がそう言うなら……」

「別にそのまま私に振り下ろしてくれても良かったけどね」

「あ、あゝ約束とか言ってたけど、アレ？ 鈴の料理の腕が上がっ

たら毎日……」

ええと毎日……。

「そう！ それ！」

「そうだ。毎日 甘い杏仁豆腐を奢ってくれるって話だったよね？
あとゴマ団子とく、あんまんとく……」

「違う！！ 何で杏仁豆腐なのよ！？ 中華料理を……！ それに
奢るんじゃないくて……！！ あーもうっ！ そのキラキラした目や
めなさいよ……！」

「嘘付き！ 僕は辛い駄目だから甘い奢ってくれるって言って
たじゃん……！」

「だから人の話を聞きなさいよ！！ もういい！ クラス対抗戦で勝
負よっ！！ 私が勝ったら何でも言う事を一つ聞いてもらうからね
……！！」

「ああ良いよ！ 僕が勝ったらご飯の時のデザートを1週間分貰う
からね！！ あっ！ それから悪魔に魂を売って身長を伸ばす方法
もね……！！」

「知るわけないでしょ……！！」

そう言って鈴は部屋を出て行った。

「一夏……」

「ん？ 何？」

「私のもデザート食べるか？」

「良いの!？」

んう？ 何だか箒の顔がニヤけてない？

第04話「男の娘は甘いモノが好き」(後書き)

感想は随時募集中です。

あー。甘いもの食べたい。

第05話「ヒーローは男の娘」(前書き)

さて、始まりましたクラス対抗戦。

そして、現れます無人機君1号。

そしてそして！ いっちゃんの最強伝説が始まるのです！

うん。ではどーぞ。

第05話「ヒーローは男の娘」

この前の日曜日、千冬お姉ちゃんが休日を返上してクラス対抗戦に向けて指導してくれました。本気で病院とか連れて行かれそうになったけど……。

何故って？ そりゃあ……ISと話してるかららしい。でもさ、聞こえるし会話も出来るんだから異常じゃないよね？

『マスター。そこで急停止をかけて腰を捻るイメージです』
「分かった!」

ギョーンッ!

反動制御・弾道予測・距離の取り方・1・0停止・アブソリュートターン・弾丸の特性・大気の状態・相手武装による相互影響を含めた思考戦闘……他にもあるらしいけど、順番に白式と潰して行って、今【アブソリュートターン】ってモノが出来たところです。

あ、降りて来いって指示出してね。

「話が出来ると言うのは本当らしいな？　こんなに上達が早いとは……白式は弾丸特性や思考戦闘のサポートも出来るのか？」

『出来ますよ』

「出来るらしいよ?」

「そうか……では、オルコット」

「はい!」

……いつからいたの?

「お前のブルー・ティアーズの武装。同じ名前でややこしいが、【ブルー・ティアーズ】を貸してやれ。認証登録をかけてやれば使用できるはずだ」

「分かりましたわ。これもクラス代表者の一夏さんの為。一肌脱ぎますわ。……あの、一夏さん。本当に脱いだらどうします?」

「……着せる?」

『放置するのが得策かと……』

と言う感じで、僕の白式に、武装【ブルー・ティアーズ】が追加登録されました。あ、常時装備は難しいそうで、登録だけです。このブレード武器の雪片式型がスロットを全部使用してしまっているから後付け装備が出来ないらしいのです。なので借りるだけ。

そして、明日は遂にクラス対抗戦が始まるのです。

『つと、言う訳で始まりました学年別クラス対抗戦！！ 学年TO Pをその手に掴み取るのはどのクラスなのか！？ では第一試合は噂の男子生徒、織斑君が腹痛・頭痛・優しさ半分の薬も効かないと言う事で残念ながら辞退してしまったので第2試合から……！』

スパーンッ

『勝手に放送部の仕事を盗るな。嘘をつくな。着替えて行って来い』

駄目でした。勇気を出して徹夜で作った文面を繰り返し読んで失敗しないようにがんばったんだけど……。どこがいけなかったんでしょうか？ はー、もう緊張して顔真っ赤ですよ。

「何やってたのよ……逃げる気だったの？ 今謝るなら少し痛めつけるレベルを下げてあげるけど？」

「何を謝るのか分からないよ。こう言う場所に慣れてないの！ 恥ずかしくないの？ みんなに見られて」

『もうマスターったら恥ずかしがり屋さんなんですから♪』

それにしても、初戦から鈴と当たるなんてな……。

プアアアアアンツ!!

【試合開始!】

「行くよ白式!」

『了解ですマスター!』

「ISに声掛けるって練習中に頭でも打ったの?」

鈴は大きい青龍刀を連結させて、ブンブン回して接近してくる。

『マスター。いつも通りにブレードで行きましょう。雪片式型では消費してしまうかもしれません。ブレードで感覚を掴んで、一気に行きましょう』

「分かった!」

「ただのブレード? そんなんじゃ折れちゃうわよ?」

ガキインツ!

「重っ! 確かに折れるかも」

『大丈夫ですよ。折れた方が良い事ありますし』

「どう言う事?」

『ずっとシステムを弄ってました。そろそろだと思っんですけどね……』

何が?

「よそ見してるなんて余裕そう……ね！」

ガキンッ！

「危なっ！ 当たったら痛そうだね……」

『とりあえず受けに回りましょう。ブレードで防御する事を心がけて下さい』

「避ければいいんじゃないの？」

『避けてばかりでは接近戦では勝ち残れません。受けて、崩す。これが相手の隙も生みます』

「さっきからブツブツ言っ！ 体調悪いなら言いなさいよね！」

『マスター来ます！』

「何が？ っとわぁ！？ 何今の！？」

「良く避けたわね？ まあ今のは威嚇だけどね……」

『衝撃砲、空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出すモノです。砲弾だけではなく、砲身すら目に見えないのが特徴で、アレは砲身の稼動限界角度はないですね』

「……どうしろと？」

『乱数回避と、高速機動で攪乱しつつ、イグニッションブーストで距離を潰すのが最良かと思いますね』

「了解。鈴！ 当たらなければどうという事は無いよ！」

「言うじゃない。当たって泣いても知らないんだから！」

【Side 管制室】

「何をやってますの！？」 私が教えたクロスグリットターンで……
「！」

「何をやっている一夏！ 練習した事が出来てないじゃないか！」

応援に熱を入れている筈とセシリアをよそに、千冬はある違和感を覚えていた。

「またか……」

「どうかされましたか？ 織斑君、上手くブレードを使って捌いてるみたいですけど」

「オルコットの武装を使っていない。それに何度か打ち込む隙もあ

ったが、雪片式型に切り替えない……」

「た、確かにそうですね。あ、でもほら、本人は結構パニック中かもしれませんし」

「だとしたら、鼻歌を歌っている場合か？」

「あ……」

そう、いつの間にか一夏は鼻歌を歌っていた。

余裕があると言う事だ。何度も何度もブレードで受ける白式。セシリアの武装も使わない。まるで遊んでいるかのように……。

そして、衝撃砲すらもブレードで受け始める。狙ってた。

見えない砲弾をどうやって受けているのか？ それは相手の狙いも理解しているから出来ることだ。

「弾道予測も出来ているか。ふっ、良く出来た弟だな……」

『あー！！ 割れた！！』

突然、モニターから織斑一夏の悲鳴が上がる。

そこにはブレードが縦に割れた様子が映っている。

「何だと！？」

「近接戦闘用のブレードが……真っ二つに？」

「一夏！」

「一夏さん!？」

【Side out】

真っ二つに割れちゃったよ……。綺麗に縦に。何故に？
1本の包丁が2本になった様な感じた。薄くなって。

「あははは！ 降参する？ いいわよ？ そんなんじゃ次は横に
折って4等分にしてあげるんだから！」

『マスター。お待たせしました。白式の真骨頂をお見せしましょう』
「え？」

ピピッ

【雪片式型・Type2】

「うわっ何？……二刀流!？」
『ずーっと細工をしていたんですけどね。上手く行って良かったですよ』

「じゃあコレ、割れたんじゃないかって……」

『割った。と言う方が正しいですね。ほぼ性能は変わらずに雪片式型が2本になったとお考えください』

「また独り言？ どうするの？ 降参？ 武装無しでタックルして来る？」

バシユッ！

僕はブルー・ティアーズを射出した。

「射撃型武装……まだあったのね」

『射撃は任せて下さい』

「分かった。絶対に勝ってデザート1週間分貰うよ！」

「ブレードも！？ 二刀流だったの！？」

鈴は距離を取って、見えない砲弾を撃って来る。でも当たらない。白式がバックアップしてくれてるからだ。

青いビットが鈴の死角から連続放射する。

「これなら！ 千冬お姉ちゃん直伝……イグニッションブースト！」

「距離が……！？」

そして、斬ろうとする直前だった。

ドオオオオオオオンッ！！！！

『試合中止！ 織斑！ 凰！ 直ちに退避しろ！！』

え？ え？ なに？

黒煙を上げるフィールド。アリーナにはアラートが鳴り響き、観覧席はシールドで塞がれていく。

『マスター！ 緊急事態です！ 所属不明のISにロックされてます！』

「えー……。聞いてないよ？」

「一夏！ 早くピットに戻りなさい！ 私が時間稼ぐから！！ 早……！！」

鈴が言い終わる前にビームが鈴に向かって飛んでいく。

「危ない！！！」

「……ちょ、ちょっと一夏！？ 放しなさいよ！ バカアツ！」

『織斑君！ 凰さん！ 早くアリーナから撤退して下さい！！ あとは先生達に任せて……！！』

「逃げたいのは山々何ですけど、まだ避難しきれてない生徒があんなにいるじゃないですか。何とかしますよ」

『何とかって……』

『本人がやると言っているんだ。コーヒーでも飲んで落ち着け山田君』

『……織斑先生。それ砂糖じゃなくて塩ですけど』

何やってるのお姉ちゃん……。

『マスター。アレは無人機です。人が操縦してません』

「鈴。あれって無人のISらしいけど、そんな事ってあるの？」

「無人機！？ ISは人が乗らないと動かないわよ！？」

うーん。そう言われても白式がそう言ってるしな……。

無人機らしきISの高出力ビームを回避しながら雪片式型を双剣で構える。

「どっちにしてもやるしかないよね？」

『そうですね』

「か、勝手に動かないでよ！ 私も……あ」

鈴がロックオンされた。高出力のビームが鈴に放たれる。

駄目だ。鈴は回避できない。僕は間に合う。……それなら。

『マスター！？ くっ！ エネルギー転換！！
【零落^{れいらくびやくや}白夜】使用！

！
』

鈴を守るために敵に背を向けた。

そう、僕はあの高出力ビームに撃ち抜かれるだろう。

目の前の鈴が何かを叫んでいる様な気がする。

エネルギーが回復して行く……何で？

「おわっ！ 光ってる！？」

『間に合ってよかったですよ。零落白夜ですマスター。私のワンオフ・アビリティです』

「零落白夜？」

白式は説明を続ける。

零落白夜。対象のエネルギー全てを消滅させる白式の単一仕様能力。ワンオフ・アビリティ相手のエネルギー兵器による攻撃を無効化したり、シールドバリアーを斬り裂いて相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられる白式最大の攻撃能力らしい。白式自身のシールドエネルギーを消費して稼動するから、使えば使うほど危機に陥ってしまう諸刃の剣でもあるようだ。

とりあえず、全力攻撃が出来るようだ。

「一夏！ 一夏！！」

「んう？ ああ大丈夫大丈夫♪ じゃあ……行くよ！」

僕は千冬お姉ちゃんを鈴を箒を……ここにいるみんなを守る！

敵に高速接近して、右の腕を振り下ろす。

敵の左腕が吹っ飛ぶ。

敵の右腕のカウンターが来る。

僕は左の腕を振り上げる。

左腕も飛ばす。

終わったね……。

『お見事ですマスター』

「コレ凄いな。零落白夜。豆腐みたいに斬れる斬れる♪」

『相手のバリア等は無効化されますからね。今回は無人機相手でしたから直接斬り落とせたわけです。人に使うには問題がありますからね』

「へー。使い過ぎは自滅するみたいだけど凄いな本当に」

『織斑 良くやった。後は教員が対処する。ピットに戻って休め』

「はーい。あつ、鈴！ デザート1週間分だからね！」

「分かったわよ。私の負けよ……強くなってるじゃない……」

「何か言った？ ほら行こうよ」

「あ……うん！」

【Side 研究室】

「やはり無人機ですね。登録されてないコアでした」

「……そうか」

アリーナに突如現れた謎の無人機。

それは世界に467機しかないはずのコアとは別モノのコアが使用されていた。

それが何を意味するのか？

そして、誰が送り込んだモノなのか？
事件なのか事故なのか？

それは一切不明だ。

とりあえずは、ISの実験中の暴走として処理し、騒ぎを起こさないようにすることとなった。

「でも、織斑君は凄かったですね。」

本当に昨日 射撃に必要な練習をただけなんですか？」

「ああ……ISの声が聞こえるらしい」

「は？ ISの声……ですか？」

「昨日それとなく検査はしたが異常は無さそうだった。だとしたら……声は本当に聞こえてるのだろうか」

ISは操縦者との操縦時間によって特性を掴んでいく。

もし、ISと話が出来るなら操縦時間では無く会話した時間で相互理解を深めて行けるパートナーと言えるだろう。

「で、でも……流石にISと話すだなんて……」

「本人がそう言っているんだ。アレは嘘はつかないからな……」

「あ、もしかして今デレました？」

「山田君。塩のコーヒーを味わうと良い……さあ」

「ひいいいっ！ ゴメンナサイゴメンナサイ！！ うぶっ！ ぶはっ！ ごぶごぶっ！」

【Side out】

第05話「ヒーローは男の娘」（後書き）

感想は随時受付中です。

基本的に作者は双剣が好きです。それが合体したり分かれたりするのには更に好きです。合体剣なんて鼻血ものです。まあ、雪片式型・双剣ver何て言うのがあればと思い、やってみました。とりあえず……この剣は卑怯だね!!

でもって、ブルー・ティアーズのビットも大好物です。ああ、ファンネル素敵☆（ファンネル違う）

次回は遂にシャル登場！ ひゃっほーい♪
では、また次回。

あー……、活動報告の件は引き続き悩み中。
とりあえず今投稿中の作品を最短コースで完結させる考えで行って
ます。出来るだけ今の質は落とさずに行こうとは思いますが、
……まあ色々とうろしく願います。

第06話「男の娘と男の娘？」（前書き）

今回はアニメ版の第5話をお送りするよ。

男の娘と男の娘が出会う時、

男の娘の心境と、見える世界に変化が現れる。

イジメ駄目。絶対駄目！

では、どうぞ

第06話「男の娘と男の娘？」

「だんだん、来たよ」

「おう、久しぶりだな」

「うん！」

「入れ入れ。ゲームでもしながら話そうぜ」

その日は休みと言う事もあって、外出して五反田^{ごたんだ}食堂と言うお店に来てます。ここには中学からの友達の五反田^{ごたんだ}弾^{だん}という友人がいるのです。何となくで『だんだん』と言うあだ名がついてます。誰が付けたのかも忘れたけど……僕だったっけ？ 一応、鈴とも友達の仲良しさんです。

久しぶりに男友達と会話出来たよ。ある意味の感動があるよね！
もう学園だと女の人ばかりだから怖くて怖くて……。

「お前以外は全員女子なんだろう？ 良い思いしてるんだろうな？」

「してないよ。凄く怖いんだから……鈴が転校して来てくれて少し居心地良くなった気もするけど、違うクラスだしさ……あゝ負けた……」

そんな話を話しながら格ゲーをやる僕達。ああ何て平和なんだろう！
ああ、僕以外でも男がIS使える人出てきてくれれば僕の立場も良くなるはずなのにな……。

ガンッ！

と、ドアは蹴りで開けられた。

「お兄、お昼出来たよ！さっさと食べに来なさい……い、一夏さん！？」

「あ、蘭ちゃん久しぶり！お邪魔してまうす」

「蘭、お前ノックくらいしろよ。恥知らずな女だと思わ……うぐっ……」

「（何で言わないのよ！！）」

「あ、言って無かったか？　そうか、それは悪かった……あははは……」

んー。たまに見るこの五反田兄妹の光景。僕が来ると蘭ちゃんは機嫌が悪くなるのかな？　あ、毎回遊びに来ると僕の方もご飯用意してくれるけど、やっぱり迷惑なんだ……。

とりあえず、お店ともなる食堂へ。ここの定食は最高です。IS学園の学食も良いけど、慣れ親しんだ味って言うのが良いよね。

「あ、あの一夏さん。ゆっくりして行って下さいね」

「あ、着替えたんだ。どっか出掛けるの？」

「あゝいえ、これは……その……」

あゝ。更に出かけるタイミングまで邪魔してたんだ……。めかし込んでこれはきつと……。

「デート？」

「違います！」

うわっ！ 凄い勢いで否定された。怒ってるよ……。やっぱりそうだよね……。蘭ちゃん良い子だから、邪魔されても出かけようとしても、そうじゃないですよって言うてくれるんだな。……何と言う罪悪感。

「ずず……はあ、お前って学校でもその調子なんだろうな？」

「え？ あゝうん。嫌われちゃうんだよね……。あははは……。」

「違うだろうが……」

何が違うのさ？

そんな疑問は晴れずに忘れ、その日は夕方近くまで遊んで帰った。

——ある日の夜の事。

「お引越しです」

「はい？」

山田先生はいつも通りのにこやかさで現れた。
僕と箒はハモって疑問符を浮かべた。

どうやら部屋の調整がついたから遂に僕は一人部屋になるらしい。
で、僕はこの部屋のままで、二人部屋を一人で使えるらしい。
……広い。でも、いつまでも年頃の男女が同室って不味いしね。

「な、何とか言ってくれ一夏」

「へ？ あ、うん。また教室で会おう？」

「先生！ 今すぐ部屋を移動します！！」

わっ 怒った！？ 何で！？

——数分後。

コンコン

「はいはい？ あれ、箒？ 忘れ物？」

「ら、来月の学年別個人トーナメントだが……わ、私が優勝したら……っ、付き合ってもらおう!!」

「……はい？」

……どこへ？ ……はっ！

前から僕が行きたいって言ってたケーキ屋さんに連れてってくれるの!?

そう言う事なら、ガンバレ箒!!

【Side 3人娘】

「聞いた？」

「聞いた」

「これは……」

「「大ニュースだ!!」」

——次の日。

「聞いた？ 次の個人別トーナメント」

「勝ったら織斑きゅんを貰えるんだって！」

「聞いた聞いた！」

「嘘！？ マジ！？」

「わーどーしよー!!！」

「なんか話が歪んで広まってる……」

「アンタ、また適当なこと言ったんじゃないの？」

「んえー？ そんな事ないと思うけどな……」

シューーンッ

「おはよう。何か盛り上がってるけど何かあったの？」

「「「何でも無いよ!!」」」

【Side out】

朝教室に来たら話し声が聞こえてきたから、いつまでも普通に会話も出来ない何て不味いと言う強迫観念に似た勇気を振り絞って声をかけてみたんだけど……。

「おはよう。何か盛り上がってるけど何かあったの？」

「「「何でも無いよ!!」「」「」」

集団的な虐めに合いました。会話に入って来るなと壁を作られました。

ああ、もうやっていけない……。

ぽんっ

「席につけHRを始める」

お姉ちゃんが僕の頭をポンツと軽く叩きます。

相談すべきでしょうか？ いや、でも忙しいだろうし山田先生に相談した方が良いのかな？ でも、副担任だし……ああ、誰か助けて……。

「今日は何と転校生を紹介します」

転校生……更に女子が増えるのか……。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さんよろしくお願いします」

あれ？ズボン穿いて……？

「……お、男？」

「はい、コチラに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を……」

そ、それは本当で……。

「「「「「キャー！ーッ！！」」」」」

「2人目の男子！」

「黒髪の織斑きゅんも良いけど、金髪も良い〜！」

「騒ぐな！静かにしろ！……織斑。そのキラキラした目は止める。泣くな」

ガシッ！

と、僕はシャルル君の手を握り締めて挨拶した。

「よろしくう！！」

「え？ え？ うん、よろしく。ところで、僕と同じ境遇の男子って……？」

そう言ってシャルル君はキョロキョロとクラスを見渡す。

自分の席？ それは僕にも分からないけど仲良くしよう！ 助け合おう！

「それがお前と同じ男子の織斑一夏だ」

「うんうん！」

シャルル君はまだ全てが珍しいのか僕と千冬お姉ちゃんの方を交互に見る。不安なんだね！ 良く分かるよ！ 僕もたった今までそうだった。ああ遂に僕と同じ男子のIS操縦者が……！！

「あはは……本当に？」

「初めまして！ 織斑一夏だよ！ よろしくね！」

ブンブン！！

と、掴んだ手を振っていた。

「……え？ あ、うん。シャルルで良いよ？」

「あはは……ごめんってば、本国じゃニュースは見たけど、顔写真とかは見れなかったからさ……女の子にしか見えなかったんだよ」

「いいもん……あ、早く着替えないと怒られるよ」

1限目は外で2組と合同でIS実習と言う事で、僕達はアリーナの更衣室に來ています。ここに来るまでも追われて大変だった……。もっと増えないかな男子。あ、でもシャルルが増えただけでも大変喜ばしい事ではあります。

「あゝ時間ヤバイ。またデコピンされちゃうよ。あ、ウチの担任がね……き、着替えるの早いね？」

「そ、そうかな？ あは、あははは……」

授業中。山田先生 対 セシリアと鈴コンビの模擬戦を見てから。実習が始まりました。アレぐらい動ける様になれ。と言う事と、教師を敬えって事らしいです。山田先生は強いです。え？ アクシデントですか？ 特にありませんでしたよ？

「次にグループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやること。では分かれろ」

先生ゝ織斑君が一人でゝす。省られてるんじゃないのゝ？ アハハハハゝゝ♪
みたいな虐めなら分かりやすかったのですが……。

「織斑きゅん！ 一緒に頑張ろう！」

「分かんないところ教えて！」

「ねえねえ！ 私も私も！」

いじめっ子が群れをなして現れた。

『逃げる』

しかし回り込まれてしまった。

これはこれで……何か狙ってそうで怖い！

シャルルは……アッチも囲まれてる……。

「そ、それじゃあ出席番号順にI Sの装着と起動。歩行までやってみようか……1番目は……」

「はいはいはーい！ 出席番号1番、相川清香！ ハンドボール部！ 趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ？ よろしくお願いします！」

そう言って握手を求められる。

……あれ？ もしかして友達になれるの？

「あゝずるい！」

「私もー！」

「私も！」

「」「」「第一印象から決めました！」「」「」

「その……友達になってくれるの？」

「」「」「何を今更」「」「」

パアアアアツ☆

「よろしく！ よろしくね！ よろしく！ ——！！！」

良く見ればシャルルも虐められて無い。
虐め何て無かったんだ……。僕一人で悩んでたんだね……。

あれ？ 相川さんがいるね。記憶が確かなら……入学して最初の自己紹介は僕からだったような……確か出席番号順でやったよねアレ。山田先生の方を見ると……「あ、忘れ……記憶違いじゃないですか？」みたいな顔をしている。記憶違いらしいです。

「はい。じゃあ次の人に交代しようか♪ 次は？」

「随分と楽しそうだな一夏。次は私だ」

「あ、箒く友達出来たよ♪」

「何だと思ってたんだ……それよりも。
これではコックピットに届かないのだが？」

「あゝ最初のうち良くある失敗ですね。織斑君、白式を出してください」

「え？ あ、はい。白式」

『はいはい。マジかるビャッキーですよ♪』

僕は白式を身に纏った。

「新しいキャラ立てで来たね」
『マスターにも友達が出来て変わった様ですし、私も変わろうと思
いまして』

「そ、それで私をどうするんだ？」

「もちろん、運んでもらうんですよ〜コックピットまで」

「「「え〜〜!! ずる〜い!!」」」」

何がズルイの？

「じゃあ落ちないように気をつけてね」

「わっ、わわ……（これが伝説のお姫様抱っこ言うやつか〜一夏
に抱っこされる日が来ようとは〜♪） い、一夏！ 今日持久し
ぶりに一緒に昼の食事を取る事にしよう！」

「んえ？ ああ、うん良いね」

————— 昼ごはん〜♪

……自分で誘って来たのに不機嫌な筈。

「どう言う事だ……」

それはこっちのセリフです。何で誘っておいて機嫌悪いんですか。

「みんなで食べるんじゃないの？ シャルルは転校してきたばかりで勝手も分からないだろうしさ」

たまたま揃ったのがこのメンバー。セシリアに鈴に誘ってきた筈。今日はお弁当の気分だったらしく作って来たそうだ。で、転校してきたばかりのシャルル。

「そ、それはそうだが……」

「ええっと……本当に僕が同席して良かったのかな？」

「男子同士仲良くしようよ。今日から部屋も同じなんだしさ」

「ありがとう、一夏って優しいね」

そのシャルルの凄く良い笑顔に何故かドキッとしてしまった。

「な〜に照れてんのよ、アンタ」

そう言いながら鈴が開けたタッパーに入っていたのは……

「杏仁豆腐だ！」

「食べたいって言ってたで……」

「い、一夏さん！ 私も今朝たまたま早めに起きてしまっただけですの！」

鈴を遮る様にそう言ってセシリアがバスケットから覗かせたのは……

「スコーンにショートブレッドだ！！」

「イギリスにも美味しいモノはがあると納得して頂きませんか……」

「一夏！ お前はコレを食べろ！」

またまた遮って出されたのは箒が持っている重箱だった。

「おはぎだ！ お団子だ！ あんころ餅だ！ 宝石箱だ！！！」

きゃっほーい！ 今日は何！？ お祭り！？ お祝い！？
全部食べて良いの！？

「あはは……甘いモノばかり……」

「あ、ちゃんと普通のも用意してあるわよ？ ほら、酢豚」

「私ですわ、サンドウィッチですわ」

「もちろん私も、から揚げだ。甘いモノは後だな」

ズウウウウン……。

「一夏ってそんなに落ち込むくらい甘いのが好きなんだ」

「……甘いモノは世界を救うんだよ。ISだってその内にでも近接戦闘用ブレードは『ミルキーフランス』に、ライフルから出てくる弾は『お団子』に、ビーム兵器なんて『無制限ドリンクバー』になる日は近いんだから……」

「無い」

「無いわよ」

「無いですわ」

「無いんじゃないかな」

「夢で見たもん!!」

『よだれダラダラ流して起きましたよね』

——次の日。

「え、えーと……今日も嬉しいお知らせがあります」

山田先生は嬉しいなら何で困惑しているのでしょうか？　というか、その右にいらっしゃる銀髪の眼帯の人は誰でしょうか？

「また一人、クラスにお友達が増えました。ドイツから来た転校生のラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

「どう言う事？」

「2日連続で転校生だなんて」

「いくらなんでも変じゃない？」

んー確かに不自然ではあるけど。女子とも仲良くやれそうだし、何でもOKだね。男子じゃないのは少し残念だけど、虐めも無くなっ
たし、と言うか勘違いだったし、うん。何でもOKだね。

「み、皆さんお静かに！ まだ自己紹介が終わってませんから！」

「挨拶をしろ。ラウラ」

「はい、教官」

教官？ って事は千冬お姉ちゃんがドイツにいた頃の教え子さん？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ！」

「……あの、以上……ですか？」

「以上だ。……貴様か」

んう？ 僕？

パシィィィンッ！

「……え？」

……叩かれた？

「私は認めない。貴様があの人の妹であるなどと……認めるものか！」

もしかして……ホッとしたところで、また虐め発生の危険！？

「……って、性別が違うよ！？」

第06話「男の娘と男の娘？」（後書き）

感想は随時受付中です。

第07話「男の娘と女の子？」（前書き）

I S 学園での初めての男友達は男じゃ無かった!？
まさか『一夏』が『一夏ちゃん』だったなんて!?!？
え!？ ソツチじゃない!？

第07話「男の娘と女の子？」

気分は少し落ち着いて放課後。

シャルルは僕と自主訓練に付き合ってくれます。

男友達って最高だよね！

「一夏。ちょっと相手してくれる？ 白式と戦ってみたいんだ」

「良いよ。あ、カッコいい。キュリオスみたい」

『第2世代、ラファール・リヴァイヴのカスタム機ですね』

そう言えば山田先生が使ってたのは普通のラファール・リヴァイヴだった。あれはあれでデユナメスみたいだったね。

さてさて、たまには自分の力だけで戦ってみようと思い、白式には通常機動のみでAI的な役割はカットしてもらった。結果は何とか勝てたけど……。シャルルの射撃が上手いのなんのって……。白式がいかに大切かが理解できたよ。

「——強いね。でも一夏が苦戦したのは単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「あゝ白式に頼みきりだからな」

『ふはははは、私の力を以てすればこの様な事など造作もないこと

よ
』

「何そのキャラ？ 前はマジかるビャッキーだったけど……」
『いえ、自分の在り方を模索中でして』

ISも大変らしいです。

「またISと話してるの？ この前の戦闘記録見せてもらったけど、一夏って射撃も上手いって思ってたんだけど、白式のおかげなんだね。じゃあ少し練習してみようか。一夏自身が射撃を理解するともっと良くなると思うよ」

そう言っってシャルルは自分のライフルを渡して来る。そして、離れた地点に的が出現した。

「うーんっと…構えって…これで良いの？」

「えっと、脇をしめて…左腕はこっち…分かる？」

後ろから寄り添うようにシャルルが教えてくれます。

あれ？ 良い匂いがする……。何だろう？ んー……ああさっきのお菓子かな……。いやでも違う様な……？

【Side 箒・鈴・セシリア】

「ねえ、あの二人……ちょっと仲良過ぎるのと違う？」

「そうですわね……噂によるとBLと言う世界もあるそうですし……」

「そ、それは駄目だ！ 不健全だ！ やはり部屋も戻して貰った方が良い！！」

「どっちが不健全なのよ！」

「そうですわ！ 抜け駆けは禁止と決めたではないですか！」

「う、うるさい！ 私は一夏の事を思ってだな……！」

そうこう言っている内に射撃が始まる。

この位置からだど、どこに命中しているか定かではないが、とりあえず言えることは。

「くつつき過ぎだ！」

「羨ましいわね！」

「射撃なら私が教えて差し上げますのに！」

男同士で訓練しているだけの筈なのだが、その光景は『羨ましい』という言葉が適していた。

【Side out】

「ねえ、ちょっとアレ!」

「嘘! ドイツの第3世代じゃない!」

「まだ本国での試験段階だ^{トライアル}って聞いてたけど……」

「確か……転校初日で織斑きゅんを叩いたとか……」

「嘘、信じられない……」

「駄かな? 飼い主になるとか……」

「許せない! いっちゃんは私のなのに!」

「も、妄想酷いわねアンタ……」

さわさわと聞こえてくるざわめき。

そこには黒いI Sを身に纏ったラウラ・ボーデヴィツヒさんがいた。

「い、一夏!?! 僕の後ろに隠れないでよ!」

「(ガクガクブルブル……) いきなり叩いてくる人なんて怖いよ……」

睨んでるよ。怖いよ。

「織斑一夏」

「ううう……な、何ですか?」

「貴様も専用機持ちだそうだな? ならば話は早い。私と戦え!」

「嫌です！　ゴメンナサイ！　スーパーお菓子タイムなので帰ります！」

「……その気が無いならば」

キュゴンッ！！

あ、死んだ……もっと……ううん、もう少しでいいから、エリーゼとルマンドとマリービスケット食べたかったな……。あ、あとチョコバナナパフェとあんみつとブラックサンダーと飲み物はバナナ・オレとイチゴ・オレと……。

ガンッ！！

「一夏！　大丈夫？　って何幸せそうな顔してるの！？」

「んえ？　はっ！　い、いきなり撃って来るなんて酷いじゃないか！！！」

気付いたらシャルルが盾で防いでくれました。

『その生徒！！　何をやっている！！』

そして、先生が来て事態は収束しました。
でも……ラウラさん僕達に全ての説明を押しつけて逃げました。酷いよ……。

「じゃあ僕は先に部屋に戻ってるね」

「分かった、僕はシャワー浴びてから戻るよ」

シャルルは箒と同じ考え方なのか、自分の部屋じゃないとお風呂に入らないらしい。そして、シャルルと分かれてシャワーを浴びて、僕は夕暮れの道を一人帰ることになった。そこで僕は重要な事に気付いた……。一人になったところを狙うのは犯罪者(?)の常套手段じゃないか!?

「ラウラさんラウラさん、お怒りでしたらお静まり下さい。お怒りでなくてもお見逃しください。お菓子が欲しいのでしたら……。くっ……。このチュッパチャップスだけなら差し上げます」
『コックリさんみたいです。それに貢物が……。カバンの中には他にもあるじゃないですか』

よく知ってるね。でもあげないよ。

「答えて下さい教官! 何故こんなところで!」

うわあっ!? 出たー! って……。教官?

あ、あれは……。お姉ちゃんとラウラさん。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「こんな極東の地で何の役目があると言うのですか! お願いです」

教官。我がドイツで再びご指導を！　ここでは貴方の能力は半分も活かされません！！」

「ほう？」

あ、あの雰囲気のお姉ちゃんは不味い……結構キテル。
怒り爆発しちゃうよ……。怖いもの知らずだなラウラさん。本当に怖い。

「だいたいこの学園の生徒など教官が教えるに足る人間に値しません。危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている！
その様な者達に教官が時間を割かれるなど……！！」

「そこまでしておけよ小娘。少し見ない間に偉くなったな？
5歳でもう選ばれた人間気取りとは、恐れいる」
1

「わ、私は……！！！」

「寮に戻れ。私は忙しい」

ラウラさんは去って行く。

……ああ怖いな怖いなあ……。でも、ラウラさんが僕を叩いた理由。
少しだけ分かった気がする。さて、帰ってお菓子を……。

がしっ

「こんなところで盗み聞きか？　異常性癖は感心しないぞ？」

「あ、いえまさか……お団子を落としてしまいまして」

「落とした団子を食べるのか？」

「……大丈夫そうなら食べます」

ぺちんっ

お姉ちゃんはそれで行ってしまいそうだったので、勢い余って聞いてみました。

「あ、待って……さっきのラウラさんが言ってたこと……お姉ちゃんの弟とは認めないって……」

「妹と言っていたが？」

「そこは流して！ その……僕の所為で2度目の優勝を逃した事を……」

「終わったことだ。お前が気に病む必要は無い。ではな」

——第2回モンドグロッソ。ISの世界大会。あの日、僕は何者かに連れ去られました。理由も目的も分からなかったけど、僕は拘束されて閉じ込められました。そこに助けに来たのが千冬お姉ちゃんでした。決勝戦を放り出して助けに……。当然、決勝戦はお姉ちゃんの不戦敗。誰もが2連覇を確信していただけに決勝戦の棄権は

大きな騒ぎを呼びました。

僕の監禁場所に関する情報を提供してくれたドイツ軍に借りを返す為、1年とちょっとの間、ドイツ軍IS部隊の教官をやっていたのです。全部、僕が道に続いて行くように用意されていたお皿の上に乗るお菓子を拾っ……不甲斐なさの所為。情けない弟ですよね。いつまでも千冬お姉ちゃんに守られている訳にも行きません

ガチャ

「ただいま……シャルル、あ、まだお風呂か……」

結構 長風呂なんだよね。

あ、ボディソープ無くなりかけてたんだっけ。

僕は柵から予備を取り出して、お風呂場に向かった。

「ボディソープ切れてるでしょ？ 替えの……」

ガラァ……

「うあつ……ああ……」

そこにはシャルルがいて……当然お風呂だから裸で……でも……男とは違って……何て言うか、胸があつて……でも男で転入して来て……男だから箒が別の部屋で、シャルルと同じ部屋になって……あれ？

「えっと……これボディソープ……」

「あ、うん……ありがとう……」

「……き」

「……き？」

「きゃあああああーっ！っ！」

「……。って何で一夏そっちが叫んで逃げるの！？」

部屋を飛び出して会う人会う人に「男が女で部屋が同じで」と分かりやすく説明をするんだけど、誰もかれもが「織斑きゅんってやっぱり女の子だったの！？」とか「フタナリ！？」とか行って鼻血出す人もいて話にならない。フタナリってなにさ？

少し走ったら少し冷静になって、僕は部屋に戻った。

そこにはシャルルが寝間着にしてるジャージ姿でベッドに座っていた。

「……シャルル……男が女でフタナリで女の子で同じ部屋ってどういう意味？」

「し、知らないよ！」

「うゝ……」

ダッ！

と、居た堪れなくなり僕はまた部屋から撤退しようとするけど、

ガシッ

と、捕まった。

「落ち着いて聞いて一夏」

「……あ、当たってるシャルル……」

そう、後ろから抱き止められているのです。ですので胸が……。

「あっ……一夏のえっち……」

「……ううう……うわあああゝんっ！ 男友達だと思ったのにゝ
！！」

僕は男だと思っていたし、友達だと思っていたし、女子でも友達が増えたと思っていた。それなのにラウラさんが現れて、男友達は実は女子で、えっちって言われて、頭の中がぐちゃぐちゃになってもう何がなんだか分からなくなり泣いた。

「な、泣かないで一夏。ね？ あゝほら、マールブルチョコだよ？」

「うわあああゝんっ！ 美味しいゝ！！ うわあああゝんっ！」

「ああ駄目だ。食べながらも泣き止まない……」

「うああゝんっ！ ……あっ！ 実はお湯で男、水で女に……！」

「違ふよ！」

「うわああゝんっ！！」

「ああ、落ち着いて一夏。ね？ ワケを話すから。ね？」

シャルルの話をまとめるとこう言う事らしいです。

シャルル・デュノアと言う名前で男装し、他にも存在した男性操縦者という触れ込みで、IS学園に転入してきた。シャルルは実子ではあるけれど、社長である父親の愛人の娘で、母親の死後に引き取られたデュノア家に居場所はなかったらしい。そして、自分の意志と関係なくIS開発のための道具として扱われてきた。IS学園へ転入したのも実家であるデュノア社がIS開発の遅れによる経営危機に陥り、会社のアピールのために世間の注目を集めさせて、僕に接近して 僕のISである『白式』のデータを盗めという社長命令によるものであった。

男同士ということで僕と部屋も同室になって、訓練や私生活を通して友情を深めていたけど、つい先ほど女性であることが僕にバレてしまった。

「――はあ、本当の事 話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと今まで嘔吐いててごめん」

「……それで良いの？ 親がいなければ今のシャルルはいない。そうかも知れないけどさ、言いなりだけだなんて良いワケないよ！」

「一夏……」

「僕も千冬お姉ちゃんも両親に捨てられたから……」

「っ！」

「僕の事は良い。今更会いたいとも思わない。でも、シャルルはその後どうするの？」

「どうって……女だって事がバレたから、きっと本国に呼び戻されるだろうね。後の事は分からない。良くて牢屋行きかな」

「だったらここにいなよ！ 僕が黙ってれば誰にもバレない！」
『ここでビャッキーの一口アドバイス♪ このIS学園の生徒は国家・組織・団体に帰属しない。生徒手帳にも載ってますよ。ではまた来週』

来週まで出て来ないのだろうか？ って今はそれよりも。

「生徒手帳にも載ってる。特記事項にも書かれてる。会社やお父さ

んにバレたとしても手出しできない」

「特記事項なんて よく覚えてたね……一夏。庇ってくれてありがとう」

コンコンコンッ

「一夏さん。まだ夕食を取られていないようですけどお加減でも悪いのですか？ 一夏さん入りますよ」

ガチャ。

シャルルをベッドに押し込み、僕は突然の来訪者セシリアに連れ去られた。

ご飯持って帰って来るからね……。――。

「と言う訳でご飯持ってきたよ」

「あ、ありがとう……。うえっ!？」

「どうしたの？」

「いやあ！ 何でもない何でもない!」

と言いつつ、シャルルはお箸を手の平に掴んで食べられずにいる。

あ、和食でお箸が使い辛いのか……。

「ご、ごめん。フォーク貰って来るよ」

「え!?! い、良いよそんな!」

「むっ! シャルルは他人にもうちよつと甘えるって言いか、頼ることを覚えた方がいいよ? そんなに遠慮ばかりしてたら損するって。最初は僕に頼ることから始めてみたら?」

「ん……じゃあ一夏が食べさせて?」

「え?」

……何で?

「あ、甘えても良いって言うから……」

『男に二言は?』

「お、男に二言は無い! だって僕は男の子! じゃ、じゃあ……はい、あーん」

「あーん……」

「お、美味しい?」

「うん、美味しい♪」

「そ、そっか。良かった」

「その……次はご飯が良いな」

一瞬で甘え上手になるシャルルに僕は箸で魚やご飯を食べさせて行きます。

うん。男の子じゃないのは残念だったけど……大事な友達だもんね。

【Side ラウラ】

夜のアリーナ。

夜風に神経を研ぎ澄ませながら様々な思考を巡らす。

「教官。あなたの完全無非な強さこそ私の目標であり、存在理由」

私は眼帯を取り、ISとの適合性向上のために行われたヴォーダン・オージェの不適合により左目が金色に変色した目を夜風に曝す。

「織斑一夏。教官に汚点を与えた張本人。排除する。どのような手段を使っても！」

「こらー！！ 夜中にそんなところで何をしている！ 何年何組だー！！ あっ！ こら逃げるなー！！」

私は寮に急いで戻る事にした。

決して見回りの教員に怒られたからではない。

逃げる訳ではない。

急いだのはアレだ。適度な運動だ。

それもこれも織斑一夏の所為だ……。許せん！

【Side out】

第07話「男の娘と女の子？」（後書き）

感想は随時受付中です。

道に並べられるお菓子のお皿。それはきつと今よりも少し幼い織斑一夏にとって黄金の道に見えたに違いない。だから攫われても仕方がない。巧妙な罠だ!!

そのお皿を辿り、道を曲がったところに檻があっても気付かない。檻の中の最後のお皿にあるみたらし団子を手に取った時！ 檻が施錠されたとしても……!!

まあ、そういうこった。

ではまた次回。

第08話「男の娘の決意」

シャー……キュツ……。

「ふう……」

お風呂の鏡で目の前に映っている自分の姿を見る。

いつ測っても伸びてない身長。

いくら沢山食べても、いくら筋トレして筋力が増えても 増えない
体重。

勝手に切ると お姉ちゃんに もの凄く怒られる長い髪。

少しコンプレックス気味の割と大きな瞳。

自分で鏡に映っている自分を見ても本当は分かってるんだ。

ムツとした顔をして、にぱつとした顔をして

キリッとした顔をして、しゅんとした顔をして

男らしく。常にそう思っても。分かってるんだ。

女の子みたいだって……。

「身長高いならまだ良いんだけどなあ……」

長い前髪に触れながら独り愚痴る。

「あ、でも 目も少し切れ長で……あ、鼻も もう少し こう……」

「一夏く！ そろそろご飯行くよう！」

男子と偽って同室になったシャルルの声がお風呂場に鈍く響いて来た。

「うわっ！ 急がないと……！！（ズルツ）……あえ？」

おかしいぞ。照明が上にあるのは当たり前の話だよね。
それが何で見えているんだ？ あれ？ 何でイスや桶が宙を舞っているんだ？

ガラガラドタンッ！！ ゴチンッ！

「一夏！？ 凄い音したけど大丈夫！？」

「あいたたたた……だ、大丈夫……」

目の前には駆けつけたシャルル。

僕……裸。

「あわわ……シャ、シャルルのえっちー！！」

「ご、ごめーん！！」

『……お約束の逆パターンですか？』

そーゆーのいらないから!!

【Side 箒】

何故だ……『私が勝ったら……つ、付き合って貰う!!』と言う話
が何故……『今月の学年別トーナメントで優勝したら、織斑きゅん
と付き合える事になっているらしいの!』と言う噂になるのだ?

優勝したら一夏と付き合えるのは私だけの筈だ。とにかく優勝すれ
ば問題はない。優勝すれば……。大丈夫だ今回はあの時とは違う。

大丈夫、大丈夫なはずだ――。

姉さんが、圧倒的な性能から兵器などへの転用なども危ぶまれた【
IS】を発表した所為で、幼い頃から私と家族は重要人物保護プロ
グラムによって各地を転々とし、気が付けば両親とは別々に暮し、
姉さんは行方知れず。私は執拗なまでの監視と聴取を幾度となくさ
れ、私は心身ともに参っていた。

それでも、剣道だけは続けた。それだけが一夏との繋がりに思えた
からだ。しかし、あの頃の私はとても醜い人間だった。相手を叩き
のめすだけの憂さ晴らしの剣道をしていたんだ。

——あれはただの暴力だった。

強いとは言えない。強さとはそう言うのを指すものではない。

一夏は剣道を辞めてしまっていたが、何も変わっていなかった。…
…本当になにも変わっていなかったが…と、とにかく 一夏は強いままだった。

今度こそ私は強さと言うモノを見誤らずに勝つことが出来るだろうか。いや、勝たなくてはならない。なにより己自身に。

【Side out】

【Side セシリア & 鈴】

開放されたアリーナ。そこには授業を終えて直行してきた人影が二人確認できる。

近々行われる学年別トーナメントの特訓と言ったところだろう。

「あら？ てっきり私が一番のりだと思ってましたのに」

「早いわね…私はいこれから学年別トーナメント優勝に向けて特訓するんだけど」

「私もまったく同じですわ」

二人は視線をぶつけ合い、火花を散らす。

「この際、どっちが上かハッキリさせておくのも悪くないわね」

「よろしくってよく♪ どちらがより強く、より優雅であるか。この場で決着を付けて差し上げますわ」

「もちろん私の方が上なのは分かりきってるけど」

「ふふん。弱い犬ほどよく吠えると言うけれど、本当ですわね」

「どういう意味よ」

「自分が上だって、わざわざ大きくして見せようとしているところが典型的なものです」

「その言葉……そっくりそのまま返してあげる!!」

それがトーナメント前哨戦開始の合図かと思われた。実際挑発し合っていた二人はISを起動し身に纏っていた。しかし第3者による二人の間を通すよう放たれた射撃により、戦いは別の展開を迎えていった。

そこにいたのは、織斑一夏を叩き、昨日も敵意を剥き出しで主砲を放ったラウラ・ボーデヴィツヒだった。黒いISを見に纏い不敵な笑みを浮かべたラウラは挑発を始める。

「くっ、ドイツ第三世代機【シュヴァルツェア・レーゲン】」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

「中国の【シェンロン】に、イギリスの【ブルー・ティアーズ】か……データで見た時の方がまだ強そうであったな」

「なに？ やるの？ わざわざドイツくんだりからボコられたいなんで大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのも流行ってるの？」

「あらあら鈴さん。どうもコチラの方は共通言語をお持ちでないようですから、あまり虐めるのは可哀そうですわよ」

さきほどまで挑発し合っていた二人は共通の敵を見据えていた。

「二人掛かりで来たらどうだ？ 男だか女だかも分からん様な下らん種馬を取り合う様なメスにこの私が負けるものか」

「今何て言った！ 私の耳には『どうぞ好きなだけ殴って下さい』って聞こえたけど！」

「この場にはいない人間の侮辱までするなんて、その軽口 二度と叩けぬようにして差し上げますわ！」

「ふん。とつとと来い」

「上等!!」

「上等ですわ!!」

【Side out】

授業が終わって少しだけ補習をするのが僕の日課です。何故って？
そりゃあ分厚い入門書を棄ててしまったからだよ。でも もうすぐでみんなの知識量に追いつくよ。

「シャルルはえっただけで勉強教えるの上手いよね」

「あ、朝の件は悪かったってば。それよりも一夏。今日も特訓するよね？」

「うん。トーナメントまで時間ないしね」

そんな感じでアリーナに向かいます。

「第3アリーナで代表候補生3人が模擬戦やってるって！」

「そりゃ見モノだわ！」

「早く早く！！！」

……とても嫌な予感がする。代表候補生でしょ？ IS学園なんだから他にいてもおかしくはないかもしれないけど……こう言う時の勘は間違いなく当たる。

「行こう一夏！」

「い、いや、第2アリーナで特訓しようか。ね？」

「何言ってるの、使用許可は第3アリーナで取ってるんだから。ほらほら！」

と言った感じで、半ば強引に手を引かれて来てしまいました。

「あ、箒も来たんだ」

「ああ……。ラウラ・ボーデヴィツヒか……」

「凰さんとオルコットさんも」

予想通りと言うか何と言うか……。ラウラさんとセシリアと鈴が模擬戦をやってるみたいです。2対1でやってるんですね……。何故にホワイ？

『くらえー！！』

『無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな』

鈴の衝撃砲はラウラさんの手によって止められていた。ダメージは明らかに無さそうだ。

「A I Cだ……」

シャルルの声に僕は初めて聞く専門用語に首を傾げた。

「A I C？」

『説明しよう！ A I Cとは、アクティブ・イナークシャル・キャンセラーの略で、もともとI Sに搭載されているP I Cを発展させたもの。対象を任意に停止させることができ、1対1では反則的な効果を発揮するが、使用には多量の集中力が必要であり、複数相手やエネルギー兵器には効果が薄い！ 次のテスト範囲ではないけど頭の片隅に置いておくように！』

今回は説明解説キャラで来たんだね……。ええと、確かP I Cって言うのはI Sの基本システムで、飛んだり加速したり減速したりするシステム……。だったはずだね。勉強したよ。

「うわーラウラさん強ー……。あれ？ 何分ぐらいコンボ決めてる！？」

そして、ワイヤーブレードを鈴とセシリアの首に巻き付けて殴る蹴るの暴行を続ける。鈴達のI Sがその形状を変えて行く。碎けて行っているのだ。I Sのシールドバリアが持たない！！

「駄目！ 駄目だってラウラさん！！ それ以上は……！！！」

僕は観客席に張られているシールドを叩くが、アチラは気付かないし、シールドが割れることもない。

「白式！！！」

『先生に怒られますよ？』

「友達がピンチなの！！ だからお願い！！！」

『分かりました』

「い、一夏？ まさか……」

「確かに雪片式型ならこのシールドも破れるかもしれないけど」

「ラウラさんが僕だけを敵視して狙ってくるなら構わない。でも僕の所為で他の人も狙われるのなんて見たく無い！ みんなに笑顔でいてほしいんだ！ だから、僕はもう逃げない……変身！！」

僕は雪片式型を装備してシールドを切り裂いてアリーナに突撃した。即座にラウラさんのワイヤーブレードを斬り、ISが解除されたセシリアと鈴を回収する。限界ギリギリだったんだね……。

『とりあえず命に別状はなしですね』
「良かった！」

「織斑一夏アアッ！！」

「白式！ イグニッション！」
『ブースト！！』

キュンッ！！

「なっ！？」

ダラララララララララッ！！

「ちっ！ ザコが！」

「一夏！ オルコットさん達を安全な場所まで！！」

シャルルまで……一緒に怒られても知らないよ？ でも……

「助かる！」

二人を両脇に抱えて、アリーナの端まで連れて行く。

「一夏……」

「無様な姿をお見せしましたわね……」

「ここで、少しでも我慢してね。シャルルは……」

振り向くとラウラのワイヤーにシャルルが捕まってる。

マシンガンで放させようとするけど、A I Cの能力で銃弾は通らない。

「面白い。世代差というものを見せつけてやろう。行くぞ！！」

駄目だ！ ここからじゃ間に合わない！！ ってアレは！！？

ギイイインッ！！！！

「きよ、教官！？」

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「お姉ちゃん……」

お姉ちゃんはラウラさんのプラズマ手刀をISのブレードで受け止める。ちなみにこちらのお姉ちゃんISは装備しておりません!!

それってISの武装だよね……。普通 生身で持てるの……？

「模擬戦をやるのは構わん。しかし、アリーナのバリアまで破壊する事態となられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントで着けて貰おう」

「教官がそう仰るなら」

そう言ってラウラさんはISを解除する。

「織斑・デュノア。お前達もそれで良いな？」

「はい!! 畏まりましたママ!!」

「僕もそれで構いません」

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁ずる! 解散!!」

「あのくちなみに織斑先生? バリア壊したの僕なんですけど?」

「アイツ等を助けるため。それならマッサージのみで不問とする。異議はあるか？」

「ないです！　ありがとうございます！」

ほっ……。

腕や足、頭にも包帯を巻いている二人は何故かムクれている。

「別に助けてくれなくても良かったのに」

「あのまま続けていれば勝ってましたわ」

「え……そうなの！？」

『有り得ませんよマスター。IS自体が動作しなくなっていたんですから』

「二人とも無理しちゃって。（二人とも好きな人にかっこ悪いところ見せたから恥ずかしいんだよね〜？）」

お茶を渡しながらシャルルは何かを小声で話した。何だろ？

「ななん、何を言っているのか全然分からないわね！」

「べべっべ、別に私無理なんてしていませんわ」

「そもそも何でラウラさんとバトルすることになったのさ？」

二人同時に喉を通りかけたお茶を咳き込むように吐き出す。

「い、いやあ。そ、それは……」

「その、なんと言いますか。女のプライドを侮辱されたから……ですわね」

「あ！　もしかして一夏の事……うわ！」

「アンタって本当に一言多いわね！！」

「そ、そうですわ！　全くだす！！」

怪我人とは思えない動きでセシリアと鈴はシャルルをベッドに捻じ伏せた。

「……怪我人だよね？」

『女の子には色々と秘め事があるんですよマスター』

ISにまで分かってしまう秘め事ってなにさ。

『分類的には女性側の造りですから』

心まで読むってなにさ。

パンツ！！

「「「「「織斑きゅん！！！！」」」」」

「うわっ!? な、何!?」

そこにはクラスの女子の皆様が押し掛けてきていた。
怪我人がいるのでお静かに!!

「ど、どうしたのみんな？」

シャルルも面を喰らっている様だ。

「「「これっ!!!」「」「」」

突き出されたのは1枚の書類。

【今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため 2人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選で選ばれた者同士で組むものとする】

他に締め切りとかが書いてある。どうやらこのペアとしてシャルルのところに来たらしい。あ、僕もですか……。

「みんなごめん!! 僕はシャルルと組むから諦めて!!」

「まあそう言う事なら……」

「他の子と組まれるよりは良いしね」

「男同士っていうのも絵になるしね」

アッサリ退いて行く女子たち。

「一夏! 私と組みなさいよ! 幼馴染でしょうが!!」

「いいえ! ここはクラスメイトである私と!」

なんて理不尽な、いや、て言うか怪我は？

「駄目ですよ。お二人のIS、ダメージレベルCを超えています。トーナメント参加は許可できません」

と、いきなり現れたのは山田先生でした。

『無理をすると重大な欠陥とかが出てしまうことがありますからね。トーナメントに出ると言うなら時間が無さ過ぎますね』

そっか。まあ安静にしてれば良いじゃない。

「（優勝したら。その子が一夏と付き合うのよね？）」

「（それだけは阻止しなければなりませんわ）」

「（と、なれば優勝は……）」

「良い！？ アンタ達！ 絶対優勝すんのよ！！」

「私達の分まで頑張って下さいな！ 心から応援致しますわ！」

おお……カッコいい。友情だよ。流石は代表候補生というエリートさん。カッコいい。決めるとこ決めるんだよね。ドラマみたいだな。

「二人ともありがとう。精一杯頑張るよ！」

「ま、眩しい。そんな目で見ないで一夏……」

「凄く悪い事をお願いしてる気がしますわ……」

そして、学年別トーナメントが始まる。

第08話「男の娘の決意」(後書き)

感想は随時受付中です。

・変身!!

元ネタ。仮面ライダークウガ。大好きw

あ、すごく短いですけど、6/9(木)の19時にバリヤを破壊した罰のマッサージ編を番外編で投稿します。

次回は嫁にするかされるかの大勝負!(違う)では、また次回。

番外編「想うが故に血は流れる」(前書き)

作者のちよー勝手な考えね。

流せばいいと思うよ。

番外編「想うが故に血は流れる」

第3アリーナのバリアを破壊した件は不問とした。

そう、今行われているマッサージによってだ。

「うわ……凝ってるね。やっぱり仕事大変なの？」

「んう……気にするな。それが仕事と言うモノだ」

「でも驚いたよ。ISの武装って生身で持てるんだね？」

「鍛えてはいるからな。あの程度の防御ぐらいは出来る」

コイツは本当にマッサージが上手い。

家に帰った時は必ずしてくれていたからな。

少しばかり昔の事を思い出すな……。

あれは初めてマッサージをしてくれた時の事だったか。

両親が私達を棄て、私はお金を稼ぐと言う事に正直 四苦八苦して

いた。

そんな私を見かねてなのか、コイツは家事全般をするようになった。そんな事をやる年齢でもないだろうに。

与えていた小遣いは溜めて料理の本を買ったらしい。

疲れて帰った家にはいつもコイツの笑顔と温かい料理があった。

時には駅まで迎えに来ることもあったな。

キョロキョロと行き交う人の中から私を探しているコイツの姿を鮮明に思い出せる。

コイツの笑顔に何度救われたか。

たまに自分の不甲斐なさを嘆いている様だが、バカバカしいな。

全く……私にはよく出来た弟だよ。

家に帰ってやることも出来ない日が続いた時は不安は感じなかったが、

自分の中の寂しさは常に感じていた。

ふと、更に深く思い出す。両親がいた頃の事だ。

蝶を追いかける純真無垢なコイツは、

私が作った花冠を頭に乗せて、読書をしている私の元へとやってきた。

<どうした。もう疲れたのか？>

コイツは落ちていた金属製の輪っかを拾ってきてこう言った。

そのリングは指輪のつもりだったのだろう。

<一夏ねお姉ちゃんのお嫁さんになるぅ♪>

ブハッ!!

<……ちゃん! ……えちゃん!>

「お姉ちゃん! お姉ちゃん! 大丈夫!? お姉ちゃん! あ、起きた!」

「うん……な、何だ? 嫁……?」

「な、何の話? それよりも、枕が血だらけで……のぼせてたの?」

私の鼻血で枕は殺害現場と化していた。

「ああ……すまない。長風呂と酒でこうなったのかも知れんな……」

いや、明らかに一瞬落ちた時に見た微かな夢の所為だろう。

誤魔化し切れたかは分からないが、自室に戻らせた。

あれから少し大きくなったぐらいで、アイツは変わらないな……。

アイツがもし仮に近い将来、

『これが僕の彼女。ねーハニ♪』

とか言って誰かを連れてきたら私は耐えられるだろうか？

「……その時は斬るか」

番外編「想うが故に血は流れる」(後書き)

感想は随時受付中です。

第09話「お嫁さんは男の娘？」（前書き）

誰の嫁にしようかな？

と言う訳で！　今回は学年別トーナメントをおおくりするよ！！

第09話「お嫁さんは男の娘？」

やってまいりました学年別トーナメント。僕は只今、控室にて着替えながらモニターを眺めております。

「凄いなく。偉そうな人がたくさん来てるね」

「偉そうって……。3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認に、それぞれ人が来てるからね」

「ふーん。でも今日で何試合ぐらい進むのかね」

『第1回戦は今日中に終わらせる予定みたいです。各アリーナで2年生3年生もやっているみたいですよ』

ほほう。スカウトしてどーすんだろーね？

「一夏に注目してる企業とか国は多いと思うよ。というか、ほとんどがそうなんじゃないかな？」

「ふえ？ 何で？」

『忘れたんですか？ マスターは男性で唯一のIS操縦者なんですよ？』

だってシャルルも……はうあ！！ 忘れてた！！

「シャルルのえっち！！」

「はい！？」 い、いきなり何を……あ、抽選の組み合わせも出た

みたいだね」

「そう言えば箒は誰と組むんだろ？ 抽選かな？ ……マジッすか？」

『これはこれは……ラウラさんとのコンビでしかも初戦で当たるとは』

これは抽選だったのだろうか？ それとも自ら「組もう」とラウラさんに進言したのか？ 前者なら凄い確率だけど、後者なら僕に對する嫌がらせに他ならないだろう。まだデザートを取った事を怒っているのだろうか？ 心の小さい事だ。……誰が小さいって！！？

「ど、どうかした？」

「ちっちゃくないよ！！」

『誰も何も言ってますんマスター』

「さ、行こうか一夏」

「おー！ 僕の友達に酷い事する人には負けないよー！ ……鈴、セシリア、見守っててね。僕、きっと勝つから」

「死んでない死んでない」

【第3アリーナ】

「1戦目で当たるとはな、待つ手間が省けたというものだ」

「に、逃がすなら今のうちだよ!!」

『さっきまでの勢いはどこに行ったんですか!』

だって、ほら、ねえ?

「一夏、練習通りのアレで行くの?」

アレ、そうアレです。え、なに? アレを知らないだって? 何を見てきたんだ君は!! あんなに僕達練習してたって言うのに!! 見せてないけどね!!

<5:4:3:2:1:>

「ふーやっぱり怖いけど……」

「絶対勝つ!!」

「叩き潰す!!」

ビーツ!!

戦闘は始まった。僕は普段は最後まで使用しない雪片式型を使い、一気にブーストしてラウラさんを袈裟切りにしようと刀を振り下ろす。が、ラウラさんのAICの前に身動きが取れなくなる。止められたならここで雪片式型は解除。エネルギーを喰ってしょうがないからね。これで終われば楽なんだけど、そうも行く筈が無いか。

「開幕直後の先制攻撃か、分かりやすいな」

「流石にこれで決まるわけ無いよね。シャルル！」

「了解！」

シャルルが僕の頭上を超える様に飛び出し、アサルトライフルでラウラさんの頭上から撃ち放つ。

「くっ！ 小賢しい！」

距離を取ろうとするラウラさんだが、シャルルは左腕装備を展開し、ラビット・スイッチ撃つ。高速切替だ。僕が接近して隙を作り、シャルルが撃つ。これが僕らの練習してきたスタイル。名付けて『Bークイック』だ！

「おおく中々行けそうだねくBークイック」

「動きで何とかするしかないからね。 っ！ 一夏！！！」

ビュオンッ！！

「危なっ！ ほ、箒か！」

箒は量産型ISの『打鉄』うちがねにてブレードを振るう。

「私を忘れてもらっては困る」

「一夏お願い！！」

「あいあいさく！」

接近戦なら僕の出番！

「箒！ 自分からラウラさんと組んだ？ それとも抽選？」

「試合中に何を言っている！」

「デザート取った事怒ってるんじゃないよね？」

「デザートはあげると言っただろう！！」

「それなら良かった。また嫌がらせかと思ったよ」

「いつ私が一夏に嫌がらせをした！！」

剣戟を交わす中、誤解は解けて行く。なるほどね、信じてたよ、本当だよ、あ、でもデザートは今後ともお願いしますよ、えへへへ。

と、そこに飛んできたのは箒の後ろから飛んでくるワイヤーブレードだ。ラウラさんの武装であるそれは、僕では無く、箒の足を絡め取り、一気に引っ張り位置を奪い取った。

「な、何をする！！」

「ふんっ」

ギンギンッ！ ガキインッ！！

「パートナーにそれは酷くない？」

「あんなモノ 邪魔なだけだ、死ね織斑一夏！」

むっ 聞き捨てならないよ それは。

【Side シャルル】

ラウラさんのAIC。停止結界は本当に厄介だ。僕の射撃が100%防がれてしまう。最初の奇襲作戦みたいに一夏が突っ込んで上、または左右からだったら怯んだから、やっぱり篠ノ之さんを先に倒さないと難しいな。

投げられた篠ノ之さんは態勢を立て直して、再び突っ込んでくる。僕はここを抑えて出来るだけ早く一夏のサポートに回らないと。

ダンダンダンッ！！

ダダダダダダダダダッ！！

「相手が一夏じゃなくてごめんねえっ」

「なっ！ 馬鹿にするな！」

うゝん馬鹿にしてはいないんだけどな。でも篠ノ之さんは接近戦が好きみたいだから、この距離間のままエネルギー切れにさせてもらうよ。

【Side out】

【Side 管制室】

「先に篠ノ之さんを倒す作戦でしょうか？」

「懸命だな。ボーデヴィツヒは、自分側が複数の状態を想定していない。パートナーの事は、端から数に入れていない」

「それに比べて、織斑君とデュノア君の連携は素晴らしいの一言です
ね」

「……このぐらいは出来て当然だ」

そして、篠ノ之のISが戦闘続行不可能となる。

「これで、織斑達のコンビネーションが再始動するな」

「これは、いきなり来ましたね！ あっ惜しい！」

「山田君、どちらかの生徒に肩入れしては問題だぞ」

「あ、すみません……」

【Side out】

箒を片付けたシャルルはこっちの援護に戻って来た。何度か繰り返すコンビネーション。基本的には同じ事の繰り返し。突っ込んで止められたら、もう一人が別の角度から攻める。その際に気をつける事は、とにかく急ぐ事。白式が言うにはラウラさんの停止結界には止める対象に集中しないといけないと言う弱点があるとの事。止められたと言う事は、もう一人は止められないと言う事だ。急いで決めないと回避されるだけで無駄弾、無駄エネルギーを消費する事になるので、とにかく有効打を当てるためにはクイックというわけだ。

「もう一回！ シャルル！ Bークイック！！」

「何度でも行けるよ！」

「くうっ！」

出来た隙に僕とシャルルの同時攻撃が入った。シャルルのイグニッションブーストからのシールドピアスと、僕の雪片式型ver. 2だ。僕の攻撃はラウラさんの右肩にある大型のレールカノンを破壊し、ワイヤーブレードを切り裂いた。シャルルのシールドピアスは第2世代とは言え最高クラスの破壊力を持ち、ラウラさんのがら空きになったシールドエネルギーを根こそぎ搾取した。決まったでしょコレ。

【Side ラウラ】

織斑一夏に右肩のカノンを破壊され、ワイヤーブレードも斬りおとされた。バランスを崩したところにイグニッションブーストで接近してきたリヴァイブの隠し武器。シールドピアスが私のシールドエネルギーを一気に奪った。コイツがイグニッションブーストだと……そんなデータは、この試合で初めて使ったと言うのか！？ ピアスは止まらない。リボルバー式の弾装が回転し、私を追い詰める。

私は…負けられない！ 負ける訳には行かない！

私はただ戦いのためだけに造られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。

私は優秀だった。最高レベルを維持し続けた。

しかし、それは世界最強の兵器。ISの出現までだった。直ちに私にも適合性向上のため肉眼へのナノマシン移植手術が施された。しかし、私の身体は適応しきれず、その結果、出来損ないの烙印を押された。そんな時、彼女に出会った。

彼女は極めて有能な教官だった。私はIS専門となった部隊の中で再び最強の座に君臨した。

「どうしてそこまで強いのですか？ どうすれば強くなれますか？」

「私には弟がいる————と、まあ目に入れても痛くもない様な弟だ。聞いているのか？ 自分から聞いたんだろうが。おい、ラウラ！ 小娘が……午後は地獄の様な訓練にしてくれる」

違う。どうしてそんなに優しい顔をするのですか？ 私が憧れる貴方は強く、凛々しく、堂々としているのに。だから許せない。教官をあんな風に変える男。認めない。――力が欲しい。

――願うか。汝、より強い力を欲するか。

「寄せ力を。比類なき最強を！」

【Side out】

「な、何アレ！？」

ラウラさんが黒い何かに包まれて行く。

そして、ラウラさんの叫び声が聞こえ無くなって行く。

アリーナ全体に警報が鳴り響く。

『非常事態発令！ トーナメントの全試合を中止。状況をレベルDと認定。鎮圧のため教師部隊を送り込む。来賓、生徒はすぐに避難する事』

「雪片……？」

そうだ。お姉ちゃんが日本代表だった頃に使用していたIS。雪

片を象っているようだ。小さい頃の事を思い出す。僕が、お姉ちゃんに真剣で剣術を教わっていた頃の事だ。

< いいか一夏。刀は振るうものだ。振られる様では剣術とは言わない――重いだろ。それが人の命を断つ武器の重さだ >

お姉ちゃんを真似するなんて……。

『……VTシステムですね』

「え？　ぶいていー？」

『ヴァルキリー Valkyrie トレース Trace システム Systemの略です。過去の

モンド・グロツソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現、実行するシステム。マスターのお姉さまである織斑千冬。最強とも言える彼女を模範として起動しているのです。』

「……ラウラさんは？　ラウラさん、泣いてた」

『恐らく、今は意識不明に近い状態でしょう。アレは操縦者を無視したシステムですから。VTシステムを使つてるとなると国に帰る事になりますね。牢屋でしょうか。ですが、これで虐められる心配も無くなりますねマスター』

「僕は……みんな仲良く出来れば」

『ラウラさんがいなくなれば　みんな仲良く出来ますよ』

「違う！　ラウラさんだって……助けたい」

『はい。それでこそ私のマスターです』

「あ、何それ！　試したの？　よく分からないけど僕を試したですよ！？」

「おーい一夏〜。白式と話すのは良いけど、エネルギー残ってる？」

あ、そう言えば……この分だと、零落白夜も使えなさそうだな。

「じゃあ、僕のエネルギーあげるよ。リヴァイブのコアバイパスを解放。エネルギーの流出を許可」

シャルルは僕の白式に何かのケーブルを繋げてそう言う。

『グイグイ来ております！ グイグイ来ております！』

「何がさ？ あ、回復して行ってる……？」

「約束して、絶対に負けないって」

「うん。負けたら男じゃないもんね」

「ふふふ、じゃあ負けたら明日から女子の制服で通ってね？」

『……負けましょうか。マスター。ここはそれが最善かと思います』

「絶対ヤダ！！ 行くよ偽物！！」

零落白夜を使用し、イグニッションブーストに雪片式型ver.

2の連撃は黒い物体をアッサリと切裂く。そして、中からはラウラさんが、僕に向かって倒れてくる。それを抱き止め、寝言のように囁かれるラウラさんの言葉に僕は返事をして行った。

「……お前は何故強い？」

「僕は……強くないよ。でも、もし僕が強いなら……みんなを守りたい」

「それは……あの人の……」

「だから、僕が勝ったからね。ラウラも僕が守るから」

「……あ」

【食堂】

「ねーねー。トーナメントはもうやらないんだよね？」

「うん。僕達はもう終わり。やって無い人だけ、データ取りたいから1回戦だけはやるんだって」

オムライスを食べながら僕はシャルルの返答に「へー」と相槌を打った。と、そんな僕らを遠目に見ている子達がいる。クラスの人達だ。

「優勝、チャンス、消えた」

「交際、無効」

「うああああん」

「「うわああああん！」」」

「なに？」

「何だろね？ あ、箒だ。箒〱先月の約束さ〱」

「っ!？」

先月の約束。部屋が変わった時に約束した件だ。優勝したらって話だったけど、別に優勝しなくても良いよね？

「と言う訳で、付き合つてよ！」

「ほ、本当か！？ 本当に本当か！？」

「うん。このケーキ屋さん！ 行ってみたかったんだよね〜！ ほら男だけだと入れないみたいだしさ〜。ありがとう箒！」

「そんな事だろうと思っ……！！ ぐっ……ああ、今度の休みにな」

「一夏つてワザとやってるんじゃないかって思う時があるよね〜。

あ、僕も付き合ってもらおうかな〜」

「織斑君、デュノア君、朗報ですよ！ 今日は大変でしたね〜。でも二人の労をねぎらう場所が今日。解禁になったのです！！」

「場所？」

————カポーン。

と言う訳で、大浴場らしいです。バカじゃない？ 男子二人しかないのに女子の大浴場使わせてもらうとか。イスに桶は何個あるんだよ。必要ないじゃん。広い。広過ぎる！！更に言うなら、シャルルは男に見せかけて女の子！！ 僕だけじゃん！！ 部屋のお風呂で良いじゃん！

「でも、お風呂サイコ〜〜あゝ死ぬまで入っていたい〜」

「お邪魔しま〜す……」

……何で！？ シャルルが現れた！！ 何でさ！？

とりあえず背中合わせで湯船に入ってます。

「僕ね、決めたんだ。この学園にいるよ。一夏が言ってくれたから僕はここにいて決めたんだよ。いたいって思えるんだよ？」

「そ、そう……」

湯船の底で手と手が重なり合う。慌てて離そうとすると、シャルルの指が僕のを絡めて離してくれない。うううううう！

「それとね、もう一つ決めたんだ。僕の在り方も……」

「あ、在り方？」

只今、絶賛裸のお付き合い中です。後ろから抱きしめられていて逃げられません。うううううう……。当たってる〜！

「僕の事はシャルロットって呼んでくれる？ 二人だけの時で良いから」

「それが本当の……」

「そう、僕の本当の名前。お母さんがくれた本当の名前」

「……分かった。シャルロット」

「うん」

【翌日・朝のHR】

「え、えつと……今日は皆さんに転校生を紹介します」

「シャルロット・デュノアです。皆さん改めてよろしくお願いします」

「えつと……デュノア『君』はデュノア『さん』と言う事でした……」

「「「「は？」」」」」

「デュノア君が……女？」

「おかしいと思った。美少年じゃなくて美少女だったのね」

「って織斑君！ 同室だから知らないって事は……！！」

「ちよつと待って！ 確か昨日、男子が大浴場使ったわよね!？」

知らない。見えない。ごめんなさい。

僕は無心の目をして何も書かれてない黒板を見ている。

ズシャンッ!!

「「「「「キャー! ! ! ! !」」」」」

そこに乗り込んできたのは鈴だった。ISを装備して。壁を破壊して……不味いでしょ。この後絶対怒られるでしょ。その前に僕の周りに人がいなくなったのは何故?

「いゝちゝかゝ! ! !」

あ、衝撃砲ですね。分かります。分かりますが……あ、分かりました。僕死にます。いつ、僕は死亡フラグというモノを立てたのでしょうか? 記憶にもございません。だんだん、死亡フラグって教わったけど、いつ立てたかも分からないと避けようが無いんじゃない? ……。

「あれ? 死んでない?」

衝撃砲が飛んでこない。僕は目を開くと、AICを展開しているラウラがいた。ISのダメージレベルは大丈夫なのでしょいか? 鈴も無理してるんじゃない? まあとりあえず。

「助かったよラウラ」

c h u ☆

………。

………っ!?

もしかして、僕、ファーストキス奪われています!?

「「「「っ!?!?」「」「」

「……お、お前は私の嫁にする!! 決定事項だ、異論は認めん!」

「「「「ええええええっ!?!?」「」「」

「……っ!! また性別が違うっ!?!?」

第09話「お嫁さんは男の娘？」（後書き）

感想は随時受付中です。

『Bークイック』……漫画・封神演義より。
太公望と普賢の掛け合いが好き。大好き。

空気≠箸……。不味い？

第10話「男の娘のお買いモノ」（前書き）

やーやーやー、久しぶりだね。

ずっとどうするか悩んでたISですよっと。

今でもどうするか悩み中ですが、今回のところまでは何とか書けた
感じです。

では、今回のいっちゃんは？

第10話「男の娘のお買いモノ」

【Side 箒】

『もすもすひねもす☆ ハーイみんなのアイドル♪ 篠ノ之 束
だよ☆』

ムカツ!!!

『って待って待って切らないで箒ちゃん!!』

そうだ落ちつけ、この人以外にどうしようもない事ではないか…
：頼む人が間違っていたとしても、この人しか頼める人はいないの
だ。

「姉さん……」

そう、自分の姉以外には……。

『やあやあやあ我が妹よ。用件は分かっているよお欲しいんだ
よねえ？ 君だけの専用機が』

その言葉に『はっ』とする。そうだ。私は専用機が欲しい。学年
別トーナメントでもそれを味わった。一夏と特訓すると言っても打
鉄を貸して貰えない事もある。ほとんどが生身での剣道になってし
まっているのも現状だ。

そして何より、力が無いと何も出来ない。

『勿論用意してあるよ』最高性能にして規格外。そして白と並び立つモノ。その機体の名前は『紅椿』！』

【Side out】

もぞもぞ……もぞもぞ……。

……何かとても嫌な予感がする。

手を伸ばし携帯を取る。時刻は早朝6時。こんなに早く起きる事になるなんて……おかしい。そもそも何だこの感触は……暖か過ぎる寝具。恐怖心を覚えながらも、僕は寝返りをうつ。そこには……

ラウラ！？ ……何故に裸！？ 何コレ。何コレ！？ ……ここは、こっそりと抜け出そう。そして、頭を冷やして考えるんだ。

部屋を出てロビーに来ました。冷たい炭酸のジュースが、僕の脳を覚醒に持って行きます。……いや、もう一本飲もう。まだ冷静じゃないみたいだ。えへへへ。

くび……くびくび……ぷはあー！ 朝一番の炭酸飲料は効くねー！！

よし。冷静だぞ。……僕は現在一人部屋だ。間違いない。じゃ

あ何故に僕の寝ているベッドにラウラさんがいる？　寝ぼけてラウラさんの部屋に入っちゃったとか？

有り得ない。寝ぼけて他人に迷惑なんて掛けた事が無い。そうだ。ラウラさんと言えばシャルロットと相部屋になった筈だ。……思い出せ、先ほどの状況を。確か、隣のベッドは誰も寝てなかった筈だ。

シャルルが抜け出してるのか？　まさか。早朝練習は今日は予定してないし、遅くまで一緒に勉強してたからシャルルも深い眠りについている筈だ……。

つまり！！　僕はあの部屋の住人で間違いが無い。侵入者はラウラの方だ！！　……何故に裸で？

「……あ」

<お、お前は私の嫁にする！！　決定事項だ、異論は認めん！！>

「あれかな？」

バカな事を思い出しているのは分かってる。でも、それ以外に理由なんて思いつかない。とりあえず、話し合って御退出願おう。

「私の嫁……」

「寝ぼけてるし……良いラウラ？　この部屋は僕の部屋で、ラウラの部屋はシャルルと同じでしょ？　さ、早く戻って」

手を差し伸べた瞬間。

ラウラは僕の手跳到かかる様に関節技を掛けてきた。

「うわっ!？」

「ふふふ……お前は寝技を覚えた方が良い」

「よっ!!　　っとゝ危ないなあ……もう少しで決まるところだったでしょ!」

「ば、バカな!？　　決まっていた筈だぞ!？」

ふふふ……中学の臨海学校や修学旅行での惨劇……いや、細かいモノも含めれば数え切れないほどの襲撃。何故か襲いかかって来る男子の猛攻を捻じ伏せて、あらゆる回避手段、反撃方法を学んできた僕が、そう簡単に囚われますかってんだ。……あ、あの頃を思い出したら少し気持ち悪くなってきた。

ガチャ

「一夏、早朝特訓の時間だぞ。学年別トーナメントは終わったが油断しては……なっ!？　　ななななな……」

「む？　　不作法な奴だな。夫婦の寝室に……」

「夫婦ーっ!？」

「ちよっとトイレ」

ガチャ……バタン。

……はて？　　今、箒が来てたような？　　……気の所為だよね。

ドタン！ バタン！！ ガシャーンッ！！

ラウラ一人で騒がしいよ……。

今日の授業は午前中で終わりです。帰りのSHRで臨海学校の話
題が出ました。持ちモノとか、重要事項の伝達だったのです。

「先生！ おやつは500円までですか！？」

「え？ あ、いえ……特に決まりはありませんが……」

す、凄いぞ高校生！！ 限度額は無し！！ ふあああ夢の様だゝ
！！ はっ！ 大きめのバッグが必要だ！！ 海外旅行用の2週間
用のキャリーケースが必要か……。ドラムバッグだと潰れちゃうか
もしれないしね！！ 行きでお菓子を大量に詰めて、帰りでは御当
地お菓子を大量に買ってくれば最高じゃないか！！

「待て織斑」

「はい！！」

「あははは……そのキラキラした目でお菓子の事を考えられても……
」

「お前の場合限度を知らんからな、本日これよりお前のオヤツを私
が選ぼう」

「えええええええっ!？」

ぺちんっ

痛い……さすりさすり……。

と言う訳で、今日の帰りにお姉ちゃんと買い物に行く事になりました。

「あ、そうだ。ねえねえ、シャルルも買い物に行かない？ 臨海学校の時に持って行く水着、あるなら良いけど」

「ぼ、僕も？ 一夏……僕を誘って……って僕はシャルロット! 二人の時はそう呼んでくれるって話でしょ!」

そうだったっけ？ シャルロット……シャルロット……。

「ねえねえ、『シャル』じゃダメ？ シャルロットって呼びにくいし、シャルの方が呼びやすいし親しみやすいし……」

「シャル？ 良いよ! 凄く良い!! (シャルかぁコレってちよっと特別な関係だよね?)」

「待たせたな。ん？ なんだデュノアも行くのか」

「シャルは買い物する場所とか知らないだろうから連れて来ました」

「……そうか。行くぞ」

電車に揺られ数分。人が沢山いるショッピングモールにやってきました。ふと、アクセサリーショップが目に入り、千冬お姉ちゃんとシャルを先に行かせて、僕はアクセサリーを一つ買いましたとさ。もうすぐ誕生日だもんね。お？

「……プール用水着、ビーチ用水着、勝負水着、ウルトラ勝負水着、超ウルトラ勝負水着！ 各種取り揃えて、いざって時に備えないと」

「いざって時がなんだって？」

そこには五反田兄妹がいました。

「んなあああ！ んななな……」

「一夏、お前も買い物か？」

「やほーだんだん♪ お菓子とか水着とか買いに来たのー。そっちは凄い量だね……それ全部水泳グッズ？」

「ああ、コイツがお前に見せつけるんだって、気合い入っだばー！
」

だんだんがいきなり飛んでったー！？

「えっと、一夏さんも水着を買いに？」

「え、あ、うん。今度、臨海学校に行くからその水着も買いに……」

だんだん……大丈夫かな……？ 何で飛んでったんだろ……？

「くっ！ そうと分かっていたら一夏さんを選んでもらうんだったあ……そうだ！ 来年になったら私、一夏さんの後輩になるんですよ？」

「え？ あっ、じゃあIS学園に来るんだ？」

「はい！ 第一志望です！ よろしくお願いしますね！」

「そっかゝ受験勉強頑張ってね」

「はい！ ありがとうございます！ えっと〴〵お兄いたらどこに行っただろ……」

んう？ 僕もだんだんを探そうとしたところ、シャルが現れたぞ？

「一夏ちよつと来て！」

「わっ！ なになに！？」

連れて来られたのは女性用の水着コーナー……恥ずかしい……場違いだ！！

「って何で更衣室に一緒に入るの！？」

「(しーっ！)」

【Side ラウラ】

凰鈴音とセシリア・オルコットと共に、私の嫁とシャルロット・デュノアの事を尾行していたのだが……どうやら見抜かれたのか……。

しかし、これが全て水着とは……この世にはこんなに様々な水着があったのか……。む？ 水着を選んでいる女子がいるな……。

「しっかり気合い入れて選ばなくっちゃねー♪」

「似合わない水着着てったら彼氏に一発で嫌われちゃうもん」

「他の事が全部100点でも、水着がカッコ悪かったら致命的だもんね〜♪」

ズキューンッ！！！！

ピッ！ トウルルルル……。

「クラリッサ。私だ、緊急事態発生！ ……う、うむ、例の織斑一夏の事なのだが……そうだ、お前が教えてくれたところのいわゆる『私の嫁』だ……」

【Side out】

「んう？ ねえねえ、外に誰かいるの？ 有名人〜？」

「だ、誰もいないよ!？」

あれ? そう言えばお姉ちゃんはどこに? はっ! 勝手にお菓子を決められてしまうという大ピンチ!!!?

「良いからとにかくここにいて! すぐに着替えるから!！」

「うわわあっ!？」

慌てて僕は壁側に向き直る。シャルは何がしたいんだ!? うわっ! 本当に脱ぎ出した!!!? そうだ! 何か別の事を考えよう!!!

え〜っつと! そうだ! ポッキー!! チョコ味・イチゴ味・ミルク味・ムースだとクリーミー・ベリー・ビター・抹茶・カスタードフォンデュ。えっとえっと他には黒ゴマ・アーモンド・はちみつ・ぶどう・御当地ジャイアントポッキー・夏みかん・ワイン。あっ! 金箔入り食べてない!! 抹茶あずきもだ!!

「……もう良いよ」

「良くない!!」

「え? だ、駄目かな……?」

振り返った先には水着姿のシャルがいる。あ……似合う。

「ううん! 凄く良いと思う……」

「……お、お客様?」

「わあっ!？」

シャツ!!

開けられる更衣室のカーテン。そこにはお姉ちゃんが……。

「何をしている……一夏……お菓子無し。水着を女子用のモノを着る。選ばせてやろう。どちらが良い？」

究極の二択!？ お菓子無し何て……でも女子用の水着なんて着れる訳が無いし……うあああゝゝ!!!!

「えっぐ……えっぐ……選べません……ひっく……お菓子食べたいです……でも男の水着が良いです……」

「……全く、もう一つ選択肢をやろう。私に似合う色を言ってみろ」

……お姉ちゃんに似合う色？

……黒？ でも赤……白……うーん。やっぱり黒かな？

「く、黒……？」

「……本当だな？」

「う、うん。お姉ちゃんには黒が似合うと思います」

「分かった。……もし、仮に黒が似合わず、周りから私が見せ物になろうとしている時はお前が全力で阻止しろ。守れ。似合うように振る舞え、似合う様にしろ」

な、何の話か分からないけど、最後に関してはどうしようもないんじゃない……。

「返事は！」

「さ、サー！ お姉ちゃんサー！」

「……よし。とりあえずこれは私からだ。後は1000円までだからな。それ以上は駄目だ」

「あ……ありがとうお姉ちゃん！！（ニパアアアア♪）」

「う、うむ……こほんっ。私は残務があるからな、先に学園に戻る。気をつけて帰って来いよ？ デュノア、コイツにこれ以上何かしたら……許さんぞ？」

「さ、サー！ イエツサー！！」

お姉ちゃんがくれたのはリボンが巻かれた金平糖の小瓶だった。大好きです！ この丸いトゲトゲの甘い誘惑にもうメロメロです！！

『そして、臨海学校が始まるのでした！！』

「わっ！ びっくりした……白式、ずっと黙ってたね」

第10話「男の娘のお買いモノ」(後書き)

感想は随時受付中です。

と言う訳で、買い物風景でした。

ではまた次回♪

第11話「男の娘は頭痛を楽しむ」(前書き)

1か月近くぶりの久々投稿のIS。

話は臨海学校の序盤に入ります！

……あれ？　もうすぐラストじゃない？

第11話「男の娘は頭痛を楽しむ」

「今11時です！ 夕方までは自由行動！ 夕食に遅れないように旅館に戻ることに！ 良いですねー！！」

「「「はーいっ！！」」」」

さあ、というわけで始まりました臨海学校。

青い海！ 焼ける白い砂浜！ 灼熱の太陽！！ 僕は現在！ 液状化現象中！！ それでも日焼けしないで赤くなってヒリヒリしちゃうだけの肌質なのでパーカーを装備しています。白式も『上を脱いだら犯罪ですよ！ 着てください！』と言った。何でさ。男は上脱ぐのが普通だよ？ まあ焼けなくて済むから良いけどさ。それにしても……。

「暑いー熱いー」

『マスター、カキ氷が売ってますよ』

今行こう！ すぐ行こう！！

「ねえねえ おりむー」

「私たちと一緒に遊ぼうー！」

「ビーチバレーしようよ！」

いつも大きめの服や制服、今回は着ぐるミ型水着を着ている布仏^{のぼとけ}本音さん（※僕は『のぼん』って呼んでます）を含めたいつもの3人組が僕のカキ氷ロードを阻む。

「カキ氷食べたかったな……どこでやるの？　　ってうわっ!?
何!?」

「にひっ！　　よっ！　　ほーら高い高い！」

「僕何で持ち上げられてるの!?　　鈴!?　　ちょっ！　　やめて！
うわっ！」

何故か僕を鈴が高い高いをしてくれます。一人胴上げ状態です。これ、実は結構怖いです。やーめーてー!!

「うわーっ♪　　楽しそう！　　私もやりたい！」

「その次あたし！」

「私も私も!!」

ノ~~~~~~~~ッ!!!

「何をしていらっしやいますの!?」

「見ればわかるでしょ？　　一夏を可愛がってるの！」

少し遅れてやって来たのは色々と道具を持ってきたセシリアだった。……って『かわいがり』!?　　あのお相撲さんの業界である『イジメ』の事!?　　僕はこの後、角材などで殴られたりしてしまふのだろうか!?

「一夏さん！　　バスの中で私と約束したのを忘れました、のッ！」

ザスッ！

セシリアさんは手に持っていたパラソルを砂に突き刺し、マットを敷いた。……何だっけ？ お菓子食べてたから、テキトーに「うんうん」頷いた気はするけど……。

「「「「?」?」?」」」」

「さあ一夏さん。お願いしますわ♪」

「アンタこそ！ 一夏に何させる気よ!?!」

「見ての通りい、サンオイルを塗っていただくのですわ♪ レディとの約束を違えるなど、紳士のすることではありませんわ!」

「紳士!?! 僕ってば紳士だから頑張るよ!?!」

（（（（ちよっ!?! 紳士じゃない!! 男の娘!?!））））

紳士、紳士か。スーツが似合う僕にぴったりな称号（?）だよね。スーツ着た事ないけど。一流の紳士になったら僕、2メートルを超えるムキムキなスーパーマンになるんだ……。

「くう……はああ……んう……はああ……」

「はああ〜気持ちよさそう〜」

「こっちまでドキドキしちゃう……」

「セシリア！ 後で私にもサンオイル貸してよね!?!」

っと、気が付いたら背中終わってた。

「後は自分で手が届くからOKだよね。じゃ、僕はカキ氷を食べに……」

ガシッ

……What's?

僕の肩を掴んでいるのは部分展開されている鈴のISの手だった。

「高い……高……いッ!!」

ブンッ!!

「ウウウエエエエイツ!!?」

ザッパーンッ!!

訳も分からず僕は海に投げ込まれた。結構遠くに投げられたな……。あーあーパーカーがずぶ濡れだよ……。

「一夏ッ! 向こうのブイまで競争ね! 負けたらカキ氷奢りなさいよ?」

いつの間にか鈴も海に入っている。そして、卑怯な事にブイ寄りにいる……出来レースだ!! 自分のお菓子以外にお金の余裕なんてないよ!!

「あ、でも待てよ! 逆に勝てば、カキ氷分のお金が出て、その分お菓子が買えるんじゃない……(にへらっ♪) むうわあ……てえ……い!! 僕のお菓子代……!!」

「っ! 足がつって!!? ぶはっ! 助けっ……!」

沈んでいくお菓子代。……って鈴!?

「大丈夫!?! 鈴!?!」

「げほっ けほっ……だ、大丈夫……」

うん、水は吐き出してるし、大丈夫そうだ。

「災難でしたわね鈴さん。私が旅館まで送って差し上げますわ!!
(オイル塗りを邪魔した恨み……)」

「えっ!?! ちょっと!?! いや、待って、私は一夏と……!!!」

「鷹月さん。ちょっと手伝っていただけませんかとお?」

「分かった! 手伝うわ!」

「私は大丈夫だってば! ちょっと? 一夏!?! 助けて~~~~」
「!!!!」

うん。元気そうだ。良かった良かった。お菓子代は浮かなかったけど、当初の予定通りだ。計画に狂いはない。これでやっとカキ氷が食べられる。

「一夏、ここにいたんだ」

「んう? シャル? ってうえっ!?! 何そのバスタオルお化け!」
「?」

シャルと謎のミイラ風な何かにまたもや阻まれるカキ氷。一瞬カキ氷よりもミイラが気になってしまった。不覚。

「ほら、一夏に見せたら？ 大丈夫だよ♪」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

「その声はラウラ!？」

そして、何かヒソヒソ話を始める二人。何だか良く分からないけど、この隙にカキ氷を……。イチゴ？ メロン？ グレープ？ レモン？ ブルーハワイ？ 宇治金時？ 更には練乳のトッピングだ♪ あゝもう舌が何色に染まっても構わない！ 望む色に染まっ
てあげられるよ!! ひゃっほーい♪

「ええーいつ!!」

バサアツ

バスタオルに阻まれた……酷い。

「ううう……わ、笑いたければ笑うがいい」

「おかしなところなんて無いよね？ 一夏」

「うん。可愛いと思うよ（その太ももに巻かれている小型ナイフさえなければもつと……というかそろそろカキ氷を……）」

「そ、そうか……私は可愛いのか……そのような事を言われたのは初めてだ」

『目標、最高性能で接近中』

目標？

「ビーチバレーですか？ 楽しそうですね」

そこに現れたのは山田先生。そして、千冬お姉ちゃんでした。

「ふあっ……」

「きゃー！」

「うわぁー織斑先生カッコいいー！」

「モデルみたいー！！」

「あ、先生入りませんか？ 私、見てるだけで大丈夫ですから」

「では」

「はい♪」

っと、見惚れてしまった。

でも、黒い水着だ。買い物時のはこのことだったのかな？
まさかね。

「一夏ってさ……ひょっとして織斑先生が好みのタイプなの？」

「そうなの！？」

「逆に聞く！？ だってさ、僕たちの水着を見た時と反応が随分違うんだもん」

「そんな事ないと思うんだけどなあ……」

「はああ、ライバル多いなあ、そこに織斑先生まで入ってくるなんて……」

うん。気を取り直して今はバレーボールの事を考えるべきだね。クイックだけじゃお姉ちゃんには通用しないと思われます。ここは『7月のサマーデビル』さんのポジションを集中的に狙って攻めていくのが有効か。

「そうだね。千冬お姉ちゃんは強敵だよ。油断しないで行こうね！」

「一夏、多分勘違いしてる……」

え！？ まさか『7月サマーデビル』さんこそが真の強敵とか！
くっ……聖なるカキ氷ロードは中々に厳しいね……。

「それで、何が食べたいんだ？」

「イチゴの練乳！！ あ、でもメロンも捨てがたい……」

「カキ氷でよだれを垂らすな……ほらっこっちを向け」

お姉ちゃんは僕のよだれを拭き取り、お金をくれます。

そうです。結局、お姉ちゃんに買ってもらいました。

「ではな」

「んう？ お姉ちゃんは一緒に食べないの？」

「教師の仕事がある。何もしてない生徒がいるからな」

楽しんでない生徒がいると……そーゆー見回りとかもあるんだね。
やっぱり教師も大変らしいです。あ、頭キーンって来た！ キーン
って！

【Side 箒】

夕陽に染まる海。それを見つめていた。

力が欲しい。だから電話をかけたんだ。あの人に。

明日は7月7日だ……あの人は、来るのだろうか。

「こんなところにいたのか、何をしている」

「あ、ちふ……織斑先生」

「気も漫ろという様子だな。何か心配ごとでもあるのか？ ……束
の事か？ 先日、連絡を取ってみた。ラウラのVTシステムの一件

は、無関係だそうだ」

「はい」

「明日は7月7日だ。姿を見せるかもしれんな。アイツ」

＜勿論用意してあるよ＞。最高性能にして規格外。そして白と並び立つモノ。その機体の名前は――――＞

「――――紅椿」

【Side out】

「最後に宇治金時ください!! 練乳たっぷりで!!」

「ま、まだ食べるの!？」

「奢ってくれるって言ったじゃん!!」

「確かに言ったが……!!」

「お腹を壊しますわよ!？」

「そうよ! 止めておきなさいよ!!」

「この宇治金時でコンプリートなの! 食べたいの!」

「はい、お待ちどう様」

「きたきたー！ わぁ素敵な感じだー！ 抹茶のシロップに小豆が乗っかって、白玉が良い感じに添えられてるし、その上から下ってくるのは練乳の滝だー♪ んうううー美味しい！」

「「「（駄目だコイツ、早く何とかしないと……）」」「」」

「くうううー！！ 頭痛いーーー♪」

第11話「男の娘は頭痛を楽しむ」（後書き）

感想は随時受付中。

えー、本来であれば前回のお話で聞く予定でしたが、すっかり忘れてました。

アンケートです!!

いっちゃん専用の白式はやはりセカンドシフトしますが、本決まりしてません。

そこで、アンケート。

【セカンドシフト時の新型装備……噛み砕いて言えば、好きな武器って何さ?】

えー、一つは考えてあります。フリスタで武器と言えばアレだね。

まあ好きな武装を言って頂いて、フリスタが興奮する代物があればぶち込みます。

場合によっては更に改造してぶち込みます。

では、アンケと感想お待ちしております。
よろしくです。

第12話「天才科学者と男の娘」 (前書き)

束がくるぞ。高台に逃げろ。

ってほどでもないんですがね。

遂に箒の紅椿が届きます。

第12話「天才科学者と男の娘」

わしゃわしゃわしゃ……ゴシゴシゴシ……ザパアアアアツ

うーみーは広がったなー おっきかったなー♪

かき氷は 美味しいしー 頭痛いー♪

ザパアアアツ かぼーんっ

『ノリノリですなマスター』

「うん。やっぱり温泉って良いよねー温泉に入りながらかき氷食べたいよー」

臨海学校。それはカキ氷パラダイスなのでした。ベンベンッ♪

「晩御飯は何かなく？ デザート付くのかなー？ 楽しみだなー」

さっき通った大広間で皆そろって晩御飯だそうでした、テーブル席と座布団で用意されました。うんうん、留学生も多いからね、御配慮ご苦勞様です。

「デザート何かなー？ プリンかなー？ ゼリーかなー？ 杏仁豆腐かも！？ 楽しみだなー。我慢できない！ 上がろうー！！」

『駄目ですよ。あと30数えてから出てください』

えー……。

でも、僕を待っていたのは、プリンでもゼリーでも、ましてや杏仁豆腐でもなかったのです。

なんて事だ!! デザートが無いじゃないか!! この旅館はどうなっておるのかね!! 海は近く景色は絶景。露天風呂は最高。しかしデザートが無い。ぬう……。一週間後またここに来てください。僕が最高のデザートを食べさせてあげますよ。……何で食べさせなきゃいけないんだ? 一人で食べるよ!

「一夏どうしたの?」

「デザートが無いの! 一大事だよ! ……まさかシャル。デザート食べちゃったんじゃない?」

「ははは、流石に一人で全員分食べるのは出来ないんじゃないかな?」

ジトッとシャルを見るが、嘘を吐いているようには見えない……真犯人はどこにいるんだ?

「織斑きゅん。お刺身だよ。はいアーン」

「あーずるーい。織斑きゅんに私も食べさせたーい!」

「私も私もー!!」

ワサビ乗っちゃってる!? いじめだ!! これいじめだよ!!

ダンツと強烈な勢いで襖が開けられる。そこには怒った千冬お姉ちゃんが。

「お前達は静かに食事をする事は出来んのか!？」

「お、織斑先生……」

「織斑、いちいち面倒を起こすな。静めるのが面倒だ」

「わ、分かりました……」

あるえー？ 僕は何もしてくない？

「しかし、お前がここにはまた騒ぐだろう……織斑はこっちで食べろ」

……あるえー？

連行された僕は千冬お姉ちゃんと一緒に晩御飯を頂きました。

「旅館のメニューだとデザートはなかったからな」

「んえ？ あっ！ 杏仁アイスだー！！ いっただきまーす！」

ぺちんっ

「食べ終わってからだ」

「……はい（さすりさすり）……お姉ちゃん」

「何だ？」

「えへへ……アイスありがとう」

「……ああ」

【Side セシリア】

一夏さんの部屋。一夏さんの部屋……。ん？ 鈴さんに箒さん、ラウラさんにシャルロットさんも……部屋の前で固まって何をしていらっしやるの？

「どうなさいましたの？」

「シッ」

4人とも部屋に聞き耳を立てているようですわね……部屋は……一夏さんと織斑先生の部屋……。そして、部屋から洩れてくる声。

＜どうした一夏、緊張しているのか？＞

＜だ、だって久しぶりだし……痛くしないでね？＞

＜では、ここに寝ろ＞

＜う、うん……。ひゃっ！ こ、怖いよお……＞

＜少しは我慢をしろ……ほら、もう一度行くぞ？＞

<ひゃんっ!>

<ふふん、大きいぞ一夏。大分溜まってるじゃないか。自分ではや
らんのか?>

<そ、そんな自分でなんて……>

「ここここ、これは一体何ですか?」

と言いつつ、私も部屋にへばり付く様に耳を傾けましたわ。普通の
ドアだったら大丈夫だったと思うのですが、これが日本のフスマ
という扉だったために、倒れてしまいましたわ。

頭をあげて中の状況を恐る恐る確認すると、そこには織斑先生の
膝の上に頭を置く一夏さんの姿が……。

【Side out】

というわけで、箒・セシリア・鈴・シャル・ラウラの5人は正座
をさせられている。

「全く、何をしているかバカ者が」

「膝枕で耳かきだったんですかあ……」

「しかし良かった。てつきり——」

「ラウラ、って言うか皆か、何だと思ったの？」

「それは勿論男女のムグツ……」

「べ、別に」

「特にナニというわけでは……」

「お、ほ、おほほほ……」

んう？ 何だろ？

「おい一夏、ちょっと飲み物を買ってこい」

「んえ？ うん……お、お菓子は良いでしょうか？」

「……一つだけだぞ？」

うーやたあー！！

おーかしーおーかしー♪ 土産物のお饅頭とか試食あるかなーぬ
ふふふー♪

【Side 千冬】

いつものバカ騒ぎをしない5人を見つつ、私はビールを煽った。
まあいい。そろそろ本題に入るか。こいつらの中に一夏を落とした

奴がいるのか確認をせねばならん。

「で、お前ら。あいつのどこが良いんだ？」

「「「「っ!?!」」」」

「まあ確かに、あいつは役に立つ。家事も料理も中々だし、マッサ
ージも上手い。付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

「「「「くれるんですかっ!?!」」」」

ふっ、この反応で分かった。まだ特定の仲には誰も成れていない
な。

「やるかバカ」

「「「「えっっ?」」」」

「女ならな、奪うぐらいの気持ちで行かないでどうする。自分を磨
けよガキども。分かっているかと思うがあいつは鈍感だ。ちよつと
やそつと押した位じゃ何も気付かない奴だ————」

【Side out】

ゴつまっ団子♪ Yeah♪ お茶を用意して味わうのだ!
! いざ! ゴマ団子決戦の地へ!! 僕は……負けない!! 味わ

いつつくす♪

脳内でテキトーな歌と状況設定を考えながら部屋に戻る。……あつ!! もしかしてこのゴマ団子みんなも食べるの!? ぼ、僕だけの戦いだよ!? さ、参加は認められないよ!!

部屋に戻ると、何故か正座に耐えかねて崩れ倒れている数名と、お姉ちゃんが『いかにあいつは素晴らしいか』と言う事について話していた。『あいつ』って言うのが誰かは分からないけど、お姉ちゃんが認めるぐらいだから、うーん……東さんとか? IS作った人だもんね。そりゃあ凄いんだろうな。

次の日の早朝。昨日残しておいたゴマ団子を炭酸飲料で消化していく。風が語りかける。うまい! うますぎる! じゅうま……あ、違う商品だ。

「つと、箒?」

縁側で箒は庭の一部を見つめている。そこには小さい木の立て看板と、ウサギの耳っぽく見える金属製の何かが見える。看板には『ひっぱってください』と可愛く書かれている。

「ねえ、これってもしかして……」

「知らん。私に聞くな」

「え、行っちゃうの? ほっといていいの?」

箒は行ってしまう。だってこれは……。ほっとけないよね……。。

僕は庭に下りて、ソレを思いっきり引っ張った。

すると、空から巨大なニンジンが降って来た。庭の土を抉り、突き立つニンジン。

『にはは！ ふふ、あはははは！』

中からであろうその笑い声は懐かしく、ニンジンは真つ二つに割れた。

「引っ掛かったねいきゅん！ ぶいぶい！」

別に引っ掛かったわけじゃないけど。空からだとは思わなかったな。

「ぶいぶい〜♪ 東さん久しぶり〜♪」

「うんうんお久だね〜本当に久しいね〜♪ 変わらないね〜良い抱き心地♪」

東さんも相変わらずのようです。抱き締められ身動きが取れないので背中をポンポンと軽く叩いてあげる。これがハグ終了の合図なのです。

「む〜、ハグタイムが短いぞ〜。ところでいきゅん。箒ちゃんはどこかな？」

「どっか行っちゃいました〜」

「そっか。でもこの箒ちゃん探知機ですぐに見つかるよ。じゃあね
いきゅん。また後でね〜♪」

『あれが、私達ISの産みの親。篠ノ之 東……』
「うん。箒のお姉ちゃんなんだ」

岩肌ゴツゴツの崖下。遊びだけじゃないんだね臨海学校。

「よし、専用機持ちは全員集まったな」

「ちょっと待って下さい。箒は専用機を持ってないでしょう？」

「そ、それは……」

確かに。僕の擬音の師匠は専用機を持ってない。そこにお姉ちゃんが割って入る。

「私から説明しよう。実はだな——」

と更にそこへ割り込んでくる遠吠えが聞こえる。

「やあああああつほおおおおお〜〜〜っ!!!!」

崖から滑り降り、その勢いを利用して飛来してくる女性。篠ノ之 東さんだ。

「ちいいいちゃあああん!! やあやあ会いたかったよちいちゃん! さあさあハグハグしよう! 愛を確かめよ——!!」

その飛来物を千冬お姉ちゃんは片手だけで受け止め、そのままアイアンクローで抑えつけている。ああ、懐かしい光景だ。

「うるさいぞ束」

「相変わらず容赦のないアイアンクローだね!」

そんなアイアンクローを解き、束さんは岩陰に隠れる箒の下へ下がった。

「じゃじゃーん♪ やあ!」

「どうも……」

「につひつひく久しぶりだねくこうして会うのは何年ぶりかなく? 大きくなったね箒ちゃくん。特におっぱいがツブ!!」

箒はいつの間にか装備していた木刀で束さんを突き放した。

「殴りますよ!?!」

「殴ってから言ったり! 箒ちゃん酷い! ねえいつきゅん酷いよねく?」

同意を求められても……大きくなった事を誉められてただけだし……大きく……

「酷いよ箒!! 自分だけ大きくなってずるいよ!!」

束さんはお姉ちゃんに言われて面倒くさそうに簡潔な自己紹介をした。

「束って……」

「ISの開発者にして天才科学者の……」

「篠ノ之 束……」

「ぬっふっふ♪ さあ! 大空をご覧あれ!!」

すると

キュピーン☆

白銀の何かが降って来た。

「僕これ知ってる! 映画で見たよ! 変形したりしてビーム撃ってくる敵でしょ!?!」

「一夏、この前の映画じゃないんだから。ラ〇エルじゃないよ……」

「この前の映画……?」

「あんた抜け駆けしたの!?!」

「抜け駆け禁止って言ってるじゃありませんか!」

「あっ……そ、そんなことより! 紅いISだよ!!」

白銀の立法8面体は束さんのリモコン操作によって紅いISが現れた。

「じゃじゃーんっ！ これぞ箒ちゃん専用機こと紅椿く！ 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製だよ♪ なんとって紅椿は天才束さんが作った第4世代型ISなんだよ！」

そこからは驚きの連続だった。速いし、刀一振りで雲は散らすはで――。

「凄いんだね〜第4世代って〜」
『マスター。私も第4世代です』

……マジッすか!？

『はい。セカンドシフトすれば更に飛躍的な性能向上が期待できます』

おお〜……僕の願いが叶うかもしれないのか。

「た、大変です!! 織斑先生ー!! これを！」

携帯端末をお姉ちゃんに渡す山田先生。何があったんだろうね？

「特命任務レベルA。現時刻より対策を始められたし――――テスト稼働は中止だ! お前達にやってもらいたい事がある」

特命任務? レベルAって凄いのかな? SとかSSSとかもあ

るのかな？

「はあはあはあ……あれ？ こちらの方は？」

「はあ……篠ノ之 束だ」

「ええええええっ！？」

第12話「天才科学者と男の娘」(後書き)

感想は随時受付中です。

束と一夏の掛け合いをもう少し上手く書きたいわけだが、キャラの認識不足などにより上手くないかな。アニメだけじゃ難しいね。

耳掃除の場所は今回気に入ってるWWW

次は福音だっけか。

さて、誰が正ヒロインなのかね……いっちゃんか!!??

第13話「白騎士事件と男の娘」(前書き)

白騎士事件を振り返ります。

一般的にはミサイルハッキング事件ですが、ウチのいっちゃんにとっては別の事件が巻き起こっていたのです。

第13話「白騎士事件と男の娘」

「2時間前、ハワイ沖で試験稼働だった アメリカ・イスラエルの共同開発の第3世代のIS、【シルバリオ・ゴスペル】通称【福音】が制御化を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった。情報によれば無人のISということだ」

「無人……」

はい、こちら現場の織斑一夏です！ ただ今、千冬お姉ちゃんより言われていた『やってもらいたい事』の説明を受けています。ISって暴走するんだね。どう暴走しているかわからないけど、僕たちは何をするんでしょうか？ 被害にあった人がいたら助けたりとか？ 資材を運んだりとか？ 多分そんな感じだと思われます。だって僕達1年生！ 先輩達のお手伝いですよ……！！

「（ねえねえ、ISの暴走って、白式もしちゃったりするの？）」「『しっちゃった方が良いですか？』」

No Thank you.

それにしても……こんなに機材運び込んで、旅館に迷惑なんじゃない……？

「その後、衛星による追跡の結果。福音はここから2キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして50分後。学園上層部からの通達により我々がこの事態に対処することになった。教員は学園の訓練機を使用して空域、及び海域の封鎖を行う。よって本作戦の要は専用機持ちにやってもらおう」

「……補佐じゃないの!？」

「つまり暴走したISを我々が止めると言う事か」

皆の力を合わせて止めるのか……暴走したISって、前に鈴と戦った無人のISと同じような感じかな？　だとしたらそこまで大変じゃないよね。

「それでは作戦会議を始める。意見がある者は挙手すること」

「はい！　目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「うむ、だが決して口外するな。情報が漏えいした場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも2年の監視が付けられる」

「了解しました」

ああ、勝手に了解された。聞いたら話しちゃダメ。聞いたら話しちゃダメ。話したら裁判と監視。話したら裁判と監視。……でも情報が無いと戦えないもんね。

『広域殲滅を目的とした特殊射撃型ですね』

目まぐるしくデータが表示されていく。わけがわからないよ。

「私のISと同じ、オールレンジ攻撃が出来るようですね……」

「攻撃と機動の両方に特化した機体ね……厄介だわ」

「この特殊武装が曲者って感じがするね……連続しての防御は難しい気がするよ」

「このデータでは格闘性能が未知数だ……偵察は行えないのですか？」

「それは無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。アプローチは1回が限界だ」

「1回きりのチャンス。という事はやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

何この人たち。怖い。何でデータを一瞬見ただけでこんなに話が膨らむの？ それにしても一撃必殺ね。良いね良いね。なんかグツと来るよね。そられるよね。でも、そんなの誰が出来るの？

「聞ってるの！？」

「んえ！？ 僕！？ 何！？ 何の話！？」

「アンタの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね……ただ、問題は……」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか……エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから……移動をどうするか」

「目標に追いつける速度のISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちょ、ちょっと待って……僕が行くの？」

『「「「当然！」」「」」』

う……白式までも……。えーと情報をまとめると、速いんでしょう？ 死角が無いぐらいに射撃に特化してるんでしょう？ で、近接戦闘能力は不明なんですよ？ それから……。

「織斑。これは訓練ではない。実戦だ。もし、覚悟が無いなら無理強いはいしない」

『ここで逃げたら男じゃないですよ』

「やります!! だって僕 男の子!!」

カタンッ

その物音は天井からだった。

「待った待った!! その作戦ちょっと待った!!」

天井から逆さまに顔を出す束さん。忍者みたい……カッコいい!!

「うわっ!? またキラキラした目してる!?」

「アンタ何に憧れてるのよ!?」

何って、カッコいいモノだよ!!

「ちいちゃん ちいちゃん! その作戦よりも更に良い作戦が私の頭の中にナウプリントイング!!」

と、束さんは千冬お姉ちゃんを呼びますが、何故か僕を後ろから抱き締めてます。

「ヤメロ」

「ここは断然、紅椿の出番なんだよ!!」

「そんなことはどうでもいいから ヤメロ」

束さんに抱き締められている僕。束さんにアイアンクローをして
いるお姉ちゃん。お姉ちゃんの手で表情は見えないけど楽しそうな
束さん。……というか、『そんなことはどうでもいい』って、特命
任務レベルAとか重大そうな事言っただけ！？

ところ変わって、やってきました滝の見える大自然！！ 遊びに
来たんじゃないよ？ ここで出撃準備するみたいです。箒がISを
身に纏い、『展開装甲』とか言うのを出しました。機体から見える
のがそれらしいのですが、束さん曰く、箒のIS紅椿は雪片式型が
進化した様なものらしいです。

「何と！ 全身のアーマーを展開装甲にしちゃいました！ ぶい
ぶい〜♪」

「ぶいぶい〜♪」

「やめろ織斑」

……怒られました。

「それにしてもアレだね〜。海で暴走って、10年前の白騎士事件
を思い出すね〜」

「白騎士事件かあ……」

——10年前。……てーんいやーずあーごー。おーけー？

東さんがISを発表して1カ月。全世界各国のミサイル2341発。それらが一斉にハッキングされ、日本に向けて発射された。世界が混乱する中現れたのが、白銀のISを纏った一人の女性だった。後に白騎士と呼ばれる事になったそのISは全てのミサイルを撃墜し、日没と共に忽然と姿を消した。まるで幻だったかのように。

って言うのは表向きの話！！ 聞いてよ酷いんだよ！？ ここからは回想でどーぞ！！ もうプンプンですよ！！



——午前11時21分。

織斑一夏はテレビに釘付けだった。それもそのはず、決定的なシーンを目の当たりにしていたからだ。そう、もう終わってしまうという感情と、いや、ここからが本番じゃないかという妙な高揚感が織斑一夏を包み込んでいた。

『愚か者！ 余の顔を見忘れたか！』

『余じゃと〜？ ……っ！？ う、上様！？ ははあっ！！』

『八坂陣之介、己の罪を不幸な親子に被せ……断じて許さんぞ！！』

『え、ええい。この者は上様の名を語る偽物じゃ！！ 斬り捨てえ

い！！！！』

そうだ。織斑一夏はこれを待っていた。悪が悪を貫く、それを正義が正義を貫き正す。夏休みのある日、親友の五反田弾に誘われても、これだけは、この時間だけは待ってくれと泣いて頼んだ作品が目の前に展開されていた。最後の上様お決まりのセリフ『成敗！！』が聞ければそれで満足だった。その時――――。

『番組の途中ですが緊急ニュースをお伝えいたします！！』

――――織斑一夏は涙を流した。更にそのニュースは日本は終わるような事を伝えるニュースだった。織斑一夏は、姉である織斑千冬に買い置きされていたお菓子を一心不乱に食った。ミサイル？ そんな事より上様だ！！ そんな上様が名前も知らない割り込みニュースキャスターに消された。その怒りは涙として流れ、両手は菓子を取り続け、口はそれを受け入れ続ける。

しかし、数十分後。ミサイルは全て撃墜されたというニュースに切り替わった。織斑一夏は血の気を引かせた。冷静になったのだ。

「ぜ、全部食べちゃった……ど、どうしよう！？」

怒られてしまう！！ 『一日一つだけだぞ？』と言われていたお菓子を1日で全て食べてしまった。「ばれないようにしなくては！！」そう思った織斑一夏は、貯め始めていたお小遣いの貯金箱。ボケっとモンスターの貯金箱を床に叩き落とし割った。

「このお金で買えるだけ買って……」

ミサイルが飛んできている！！ そんなニュースがあったにも関

わらず、駄菓子屋のお婆ちゃんはいつもとどおりにお店をやっていた。織斑一夏はお菓子を買えるだけ買って家に急いだ。ミサイルが撃墜されたというニュースが流れてから2時間ほどの出来事だった。

「お姉ちゃんは学校で、帰ってくるまでに後30分ぐらい。でも、ミサイルの事件で交通機関はマヒしてるからもうちょっとかかるはず、間に合う、間に合うよ!!」

しかし、玄関の扉は開いていた。

そして、リビングには泣き崩れる姉の姿があった。

織斑千冬は急いで家に帰ると、弟はいなかった。まだ電話や交通機関は麻痺状態だ。弟はどこだと探す。そして、リビングに入るとそこには食い散らかしたお菓子の数々。それは織斑千冬が弟の為に用意したお菓子の数々だった。そして、弟が大切にしていたポケッとモンスターの貯金箱だったであろう破片達。

「一夏……一夏!?! どこだ一夏!?!」

探した。探し続けた。同じ場所を何度も確認するが、どこにもいない弟。ミサイル事件に乗じて空き巣の様な者が侵入し貯金箱を割ったのだろうか? 一夏は攫われたのだろうか? 嫌な予感、予測しか頭に浮かばない。織斑千冬は泣き崩れた。気丈な姿はどこにもない。

ガチャッ

「開いてる!?!」

弟の声だ。織斑千冬は涙も拭き取らずにリビングのドアを見つめていた。ゆっくりと開けられるドア。そこには最愛の弟がいた。

数分後、織斑一夏は怒られた。その上、割れた貯金箱の破片でも怒られた。

「心配させるな……全く。1週間お菓子抜きだ！！ これも没収！！」

「がーんっ！！」

「嘘は付くな。心配させるな。物は大切にしろ。全く、貯金箱は底の部分から開けられたというのに」

「マックマー！！ ごめんねーマックマー！！ うわあああんっ！！」

※マックマ……『ポケっとモンスター』で織斑一夏が一番好きなモンスター。貯金箱で、底の部分にゴム製のフタがある。クマっぽいデザインのモンスター。



……つまりだよ？ あの時割り込みニュースキャスターさんさえ出て来なければ、マックマが粉々になる事も、僕が怒られる事もなかったわけさ。酷いでしょ！！？

「白騎士って一体誰だったんだろうね〜!?　ねえねえちいちゃ〜ん!」

「知らん」

「うんうん。私の予想ではバスト88セン……!!」

流石は天才・束さん!　白騎士の予想がついてるなんて凄いな〜!

さてさて、作戦の話に戻ります。セシリアさんは強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』があれば絶対成功させると言い切りましたが、量子変換されてないのでボツ。束さんの設定する紅椿は7分で行けるらしく。箒と僕で挑む事になりました。

何としても成功させないといけないね。

一撃必殺は僕にしかできない事なんだから。

箒と一緒に……そう思って箒の方を向くと、箒もこっちを見てます。

「えへへ〜」

「……ふ」

硬かった箒の表情も少し緩みました。

さあ、あとは福音を落とす事だけに集中すれ……

「あ、おね……織斑先生……！ シュークリーム分が不足してます！
」

「そう言うと思って用意してある」

わふ……！！ 抹茶にイチゴにバナナにチョコ、いろんな種類があるぞ……！！

シューアイスまで！？ あーもう死んでも良いかも……♪ おいふい……♪

第13話「白騎士事件と男の娘」(後書き)

感想・アイディアは随時受付中です。

第14話「男の娘……散る」(前書き)

モッピー知ってるよ。この物語の主人公はモッピーだって。

はい、嘘です。

今日は福音の倒し方を解説するぞ！

第14話「男の娘……散る」

『マスター、作戦開始までもう少し時間がありますね〜』

「あるね〜、お、イチゴ味がやっぱり美味しい〜」

『今回の作戦。箒さんが問題かと思われます』

「え？ 何で？ 紅椿も調整完璧なんですよ？ 問題なんてないんじゃない？」

白式が言うには新たな力を得たから、それも今回に限っては圧倒的とも言えるほどの力だ。それを手に入れたから油断や慢心、それだけならまだしも、力に飲まれて自分を見失う事がある。というこ
とらしい。

というわけで、箒のところにやってきましたよ〜っと。ここは白式に教えて貰った通りに声をかける事にします。いつもと違う呼び方だから少し不安だけど……。こほんっ！

「ねえねえモッピー♪」

「怒らせたいのか？（ビキビキビキ……）」

うん、失敗だコレ。BAD END……デレデレ？

Take 2! ……もう一回。

「箒〜箒〜♪」

「何だ？」

成功したよ!! やっぱ白式の言ったアプローチは怒られるよね。
普段通りが一番さね。

「あのね、紅椿って凄いよね。速いし強いし紅いしさ」

「ああ……色は関係ないと思うが……」

関係あるよ! 戦隊モノでもレッドが主役でしょ!? ブラック
も良いけどさ!!

Side 箒

「あのね、紅椿って凄いよね。速いし強いし紅いしさ」

「ああ……色は関係ないと思うが……」

「えっと、そのね? その……大丈夫?」

「っ!?!」

その一言で一夏が何を言わんとしているのかが伝わって来た。『
力に飲み込まれるな』と、そう言いたいのだろう。遂に手に入った

私の専用機。その性能は規格外。更に他機種の追隨を許さない第4世代型IS。間違はなく心は撃ち震え、どこかで全力でこの力を試したいとさえ思っていた。

ふと、数ヶ月前の一夏を思い返す。ISを動かした初めての男性操縦者としてニュースになり、IS学園で再会したかと思えばチャホヤされるのは当然、ましてや千冬さんの弟だ。騒がれないはずがない。そして、すぐに代表候補制と戦うことになり、専用機を宛がわれた。それなのにコイツは自分を見失わなかった。自分の出来ることを考えて、それを地道に繰り返してるだけだ。空回りしているのはいつも周りだ。

「わ、私は……」

「あのね、箒……その、よろしくね？」

手を差し出してくる一夏。どうしてコイツはこんなにも強いんだ。腕力などで捻じ伏せることは出来るかもしれない。だが、コイツの心の強さには勝てない。そうだ。小学校の頃もそうだったか……？



「おい男女」

「今日は木刀持っていないのかよ？」

「くっ……」

少し男勝りな女子は『男女』だと言われる。男の輪に入ってくる

な、という様な反抗だ。あの頃の私は当然、更に食って掛かった。男子とケンカすることも多かった。しかし――。

「うるさいな、暇なら帰ってよ、もしくは手伝ってよ」

そこにほとんどと言って良いほどに一緒にいたのが一夏だった。

「何だよ織斑、お前こいつの味方かよ？」

「この男女が好きなのか？」

「だよな、こいつ等夫婦なんだよ。知ってるんだぜ、お前ら朝からいちゃいちゃしてるんだろ？」

「だよなあ、コイツこの前なんかリボンなんかしてたもんなあ、笑っちゃうよな」

手が出そうになった。

「お姉ちゃんが言っていた。男がやってはいけないことが二つある。女の子を泣かせることと、食べ物で粗末にすることだ！」

だが、それを先に手を出してたのが一夏だった。その姿は私にとって何とも輝かしいものに見えた。その拳は3人の男子を圧倒した。

「ブゲラッ！」

「ゼハアッ！」

「モゲエッ！」

人差し指を天を示すように勝利のポーズを決める一夏がそこにいた。

……ここで勘違いしないでほしいのは、3人の男子は死んでいないという事だ。今頃どこかの高校で元気にやっているだろう。

一夏は私の親がやっている道場の門下生だった。その日も放課後に道場に来た。練習が終わり、その日の事について私は話を振った。

「お前はバカだな」

「えー……どういう意味？」

「あんなことをすれば、後で面倒なことになると考えないのか？」

「あー、考えないかも。許せないからやったことだしさ、だから篠ノ之さんも気にしない方が良いんじゃない？ 前にしてたりボンも似合ってたんだしさ、またすればいいじゃん」

「ふ、ふん！ 私は誰の指図も受けない！ ……箒だ」

「ふえ？」

「大体この道場は、父も母も姉もみんな篠ノ之なのだから、紛らわしいだろ。次からは名前で呼べ。良いな？」

「じゃあ一夏ね」

「え？」

「織斑も二人いるからね。僕の事も名前で呼んでよね、箒♪」

———その笑顔だ。そうだ思い返せば、その笑顔に私は全てを持っていかれた気がする。

ちなみに、次の日あたりから他の男子からのイジメみたいなモノは無くなり……。

「お、織斑……こ、これ食べるか？」

「これもやるよ！」

「あ、俺のもあげる！」

「お菓子だ!! ありが……!!」

「織斑君!! お菓子を学校に持ってきてはいけません!!」

「あーん!! 僕のお菓子ー!!」

男子からも、好意を持たれるようになっていたがする。友情以上の好意を……もちろん。

「織斑きゅんって可愛すぎ……」

「抱きしめたいんですけど……」

「あ、鼻血が……」

女子からも同様だった気がする……。



……少しずれたかも知れないが、一夏の言わんとしている事が分かった。

「ああ、自分を見失うところだったな……よろしく頼む一夏」

Side out

『11…25……そろそろ時間ですよマスター』

「あーい。箒〜行こう〜」

「緊張感というモノは無いのか……?」

「え、だって箒と一緒にでしょ？ 大丈夫だって〜。じゃ、お願いね」

「……し、仕方のない奴だな。本来ならば女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

『大胆発言ですね〜』

「んう？ どういう事？」

『マスターったら相変わらず鈍いんですから、上に乗りたいって言うてるんですよ〜』

「乗ってどうするの？」

「何を話してるか分からないが、一夏に不純な説明はするなよ？
白式」

『読めましたね……相性シンクロはバッチリみたいですなマスター』
「何だかよく分からないけど、行こっか！」

どこへって？ 『しるばりお・ごすべる』って言う銀色の暴走I
Sを止めに行くんだよ。前回まで見てない！？ いきなりここから
読んでどうするの！ はい、最初からどーぞ！！

『マスター。滅多メタなことは考えないでください』

巧い事言った。みたいな思考が入ってくる。今日も白式はノリノ
リのようにです。

でもって、作戦開始時刻となって超高速で飛んでいく僕達。何回
も音速の壁を超えてポロポロと落ちて行くルマンドの食べカス。

「一夏！ 食べるのを止めろ！」

ゴオオオオオオオオツ！！！！

「えー！？ なーにー！？ 美味しーよー！？」

「食べカスがこっちにも落ちてきてると言ってるんだ！」

ゴオオオオオオオツ！！！！

「食べたいのー！？ あ……最後の一個だ……しかも少し食べちゃった……これで良い？」

「なっ！？ 誰が食べたいと……！（食べかけ……間接……）い、頂こう！」

「あー！！ 箒！ 見えた見えた！！（ぱくっ、サクサクサク……）」

「あー！！ 私の間接キスがー！！」

「止まって箒ー！！（ポムポム！！）」

『（甘い！ この二人激甘です！！ と弄り倒したいところです
が！）マスター！ 全力で行きますよ！！』

一撃で片付ける！ その意気込みでやって来た。白式は装備を雪片二型に切り替えて、更にワンオフ・アビリティである零落白夜を使用する。

箒は何か落ち込んでいるのか、話は全く聞かずに減速せずにフルスピードで目標にどんどん接近していく。

「ええええええええ！？ だ、大丈夫なの！？ ぶつからんじゃ……！！！！」

『ポイント修正必要ありません。完璧なポジションです！』

そう言うことなら問題ない。僕はタイミングを見計らい袈裟斬りに振り下ろした。手応えは十分。ほぼ全力を注いだその一振りは、片翼と片腕を斬り落とし、銀色の機体はバランスを崩し、海へと落下していった。

残りのシールドエネルギーは50ぐらい。イグニッションブーストも1回使ったら終了と言うぐらいに叩き込んだ一撃だ。

「やった!!? 楽勝楽勝!! 帰ってお菓子パーティーだー!!」

『はい! ……いえ! いけません!! セカンドシフトです!!』

白式の言葉とほぼ同時に、福音は光に包まれながら海から噴出した。

キュンツ!

エネルギーが収束していく。そして、それは僕達に向けて放たれた。

「箒! 箒!! 不味いつて!! くっ!!」

『マスター!!?』

箒をかばって、僕は光に包まれた。

「い、一夏!!?」

箒……無事だったかな?

第14話「男の娘……散る」(後書き)

感想は随時受付中です。

前書きでの一言。『今日は福音の倒し方を解説するぞ!』

はい、嘘です。

次回はセカンドシフトのご予定です!

どーしよ♪ どーしよ♪

第15話「吼える男の娘! トッポをねらえ!」(前書き)

えーまずは、

総合評価が1000ptを突破した事を心より感謝申し上げますのだよ。

ウチの娘を見てくれてありがとう。

嫁にはあげられないけど(↑ココ重要)仲良くしてやって下さい。

そして、先に言っておきましょう。

今回の仮題『吼える男の娘! トッポをねらえ!』

誤字ではありません! 『トップ』ではなく『トッポ』で合ってます。

【?ロツ〇】様に怒られるんじゃないかという恐怖WWW
怒られないように言っておこう。宣伝ですWWW

では、第15話です。どーぞ!

第15話「吼えろ男の娘！ トッポをねらえ！」

空は静まり返っていた。

激しい金属の轟音が一度鳴ったと思ったら、海は少し不規則な波を立てた。しかし、それもまた一瞬の事。青く輝く光を海から噴出させたのだ。

いずれも世界最強の兵器と謳われる『IS』によるものだった。

時間は少しさかのぼる。白と赤による一撃は銀色の機体を海へと叩き落としたのだ。しかし、銀色はその輝きを更に強め反撃に出た。それもまた一撃だった。白き機体は紅い機体を庇うように前に出て、その一撃を受け止めた。そして、逆に海へと落ちて行く。紅い機体はすぐさま片割れとも言える白を追った。攻撃もまた止んだ瞬間である。

——数分後。銀色の機体は数キロ移動し停止した。
自らを癒すように膝を抱え宙に浮き続けた。

————まるで、待つことが目的かのように。

「作戦は失敗だ！

以降、状況に変化があれば召集する！ それまで各自現状待機しろ！」

その言葉が誰の心をも傷つけていた。

その言葉を発した本人の心でさえも。

篠ノ之 箒は自分を軽蔑していた。

彼女のISは規格外。その作戦に参加出来たであろうどの機体よりも速く、強かった。それもそのはず、ISの開発者である天才・篠ノ之 束が作り上げた機体だからだ。しかし、欠陥とも言えるモノが一つだけあった。適正值も含んだISとのシンクロ率だ。シンクロ率というモノは、使用した瞬間に発揮、維持されるモノではない。勿論、ある程度の性能は引き出せるだろう。それこそ『紅椿』だ。並大抵のISならば圧倒できるほどだろう。

しかし、ISというモノは自己進化が設定されている。戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、IS自らが自身の形状や性能を大きく変化させる「形態移行」を行い、より進化した状態になる。これは、コアの深層には独自の意識があるとされていて、操縦時間に比例してIS自身が操縦者の特性を理解し、操縦者がよりISの性能を引き出せるようになるというモノだ。

設定は完璧。だが、ISとの共有した時間などほとんど無かった。

自分の機体の説明を受け、少し乗って能力を確認し、その力に溺れた。しかし、それは修正された。意識不明の重体に陥った織斑 一夏の言葉によって。しかし、彼女は集中し切れなかった。自分の意識が別に移った時に、全ては刹那が如く流れて行った。

本当に絶望というモノを感じた時、人は涙を流すことすら忘れる。絶望という意識の後に自然と流れ出て行くモノだ。そして、新たな希望を与えられない限り、立ち直ることも出来ないままだ。

織斑 千冬は姉という立場から指揮官という立場に居続けなければならなかった。

実の弟が意識不明の重体。それでも尚、一夏の傍にいる事は立場上叶わなかった。考えないようにしても、必ず意識をしてしまう。彼女は自分を叱咤し続ける。しかし、最愛の弟が危篤の状態を意識して何が悪いのだろうか。しかして、それを強く言える者もない。作戦室の人間は、その立場を尊重し、織斑千冬という人物を尊重し、ただただ、データを取り、迅速に作業を進めることしかできなかった。

「停止していますね……本部はまだ、私達に作戦の継続を？」

「解除命令が出ていない以上、継続だ」

「ですが……これからどの様な手を？」

そして、現状待機を言い渡されていた者達がやってくる。作戦室への入室は却下された。織斑千冬は、入室を許可できない事を少しばかり声を荒げて伝え、自身をまた叱咤した。

作戦に関与していた中で織斑 一夏を慕う者は誰もが言葉を失っていた。

「一夏さん……」

「一夏……」

「何やってんのよアンタ……」

「私の嫁はお前しかおらんのだぞ……」

しばしの看護の後、彼女達は作戦室へ織斑一夏の現状を伝えようとやって来た。しかし、作戦指揮官の顔も見ることもし叶わない。何故、弟が意識不明の重体であるにも関わらず、指揮官は会いに行けないのか。同じ敷地内で眠っているだけだと言うのに。その非情さは彼女達を締めつけた。自分達はなんと無力かと思ひ知らされるばかりだった。

仮に織斑一夏を見舞うだけで、福音を倒せるという事があるのならば、誰も迷いはしないだろう。しかし、現実という刃は突き付けられているのだ。その作戦に携わっている者達全てに対して。だからこそ、誰も何も出来ないでいる。

「ねえ、ジャンケンしようか……」

「箒さん、ですわね？　私が命令違反などすることになるとは……」

「メンドくさいのは嫌よ……でも、仕方無いか」

「教官に怒られる事は慣れている。初めて一夏を叩いた時も呼びだされたからな……」

「――「ジャンケンッ――！！」――」

そして、篠ノ之　箒の下へ、彼女達は向かった。

Side 箒

休めと言われても休めるわけがなかった。行く場所も無く、私は海に来ていた。もう、福音のいる場所も分からない。一夏も意識不明にしてしまった。私の所為で。そうだ。全ては私の所為だ。

「箒」

……。

「あーあー分かりやすいわね。あのさ！　一夏がこうなったのってあなたの所為なんですよ！！　……で？　『落ち込んでます』ってポーズ？　ザケンじゃないわよ！！」

胸倉を掴まれ、私を真っ向から見据えてくる。その目は怒りに満

ちていた。しかし、それは一夏に関連した憎しみの眼ではなく、私への純粹な怒りだ。

「今戦わなくてどうすんのよ!!」

「もう、ISは……使わない」

パシィインツ!!

その平手打ちに私は砂浜に倒れ込んだ。

「甘ったれてんじゃないわよ!! 専用機持ちつてのはね! そんな我儘が許される立場じゃないの!! それともアンタは! 戦わなきゃいけない時に戦えない臆病者なわけ!?!」

……どうしろというんだ。

「どうしろというんだ……もう敵の居場所も分からない。戦えるなら……私だって戦う!!」

「やっとやる気になったわね」

「あ……」

「あーあー面倒くさかった」

そこには、恋敵^{ライバル}達が勢揃いしていた。

Side out

ビービービービービー！！

鳴り響くアラート。それは停止された状況を 一気に激動へと変化させるものだった。福音の停止位置に5機の機影が浮かぶ。

「あいつ等……」

「命令違反です！ 呼び戻しましょう！」

「こうなるだろうとは、思っていたがな……」

――空。

青い空に、白い雲。

――水。

空がそのまま映し出される様な、鏡のように綺麗に一面に張られた水。

———木。

僕は、木の上で腰かけている。

———女の子。

真っ白な服。真っ白な帽子。真っ白な長い髪。真っ白な肌色。

何でだろう……懐かしい。

きっと知らない子だと思う。それなのに何故か懐かしい。

「呼んでる……」

「ふえ？」

空を見上げて女の子はそう言う。釣られて空を見上げるけど何も無い。視線を戻すと女の子は消えていた。

僕はどうしてここにいるんだろう？

よく、思い出せない。

確か……白式で……あ、その白式も無い……。

辺りがオレンジ色に染まって行く。夕暮れのように白い雲は黒く

なり、透き通っていた影も黒くなる。

「力を欲しますか？」

大きな太陽を背に、一機のISが現れる。

それもまた、何か懐かしい感じがした。そして、凄く近い感じがした。

「力を欲しますか？」

繰り返し聞いて来るISに僕は答えた。

「うん」

「何故？」

「うーん……友達を……仲間を守りたいんだ」

「仲間」

「うん。世の中ってさ、お菓子食べるだけじゃ生きていけないんだ。僕が大人になったらね、お菓子を食べるためにはお金が必要で、そのお金は働かないと手に入らない。そこまで行くためには人間関係って結構重要だし、戦わなきゃいけないこともあると思うんだ。僕は学校で色々と怖い思いしてるけど、勘違いだったり、実は何も怖くない事も結構あったりして……でも、僕だけが大変なわけじゃなくて……んーと、そうするとね、友達が出来るの。でね、大変さを分けあったり、楽しい事も分け合えるんだ。あ、お菓子もくれたりするんだよ？ えへへ……。えーと、だからね、友達とか仲間とか、大変なこととかから守れるようになりたいの」

「そう」

「だったら行かなきゃね」

あ、さっきの女の子。

「ほら」

手を取られ、直感が閃く。僕の手首にいつもいてくれる存在だ。

「ね？ マスター♪」

そうだ。この子は白式だ。

「マスターの夢は何ですか？」

「夢……うーんとねえ……。僕ね、TOPPOみたいになりたいんだ」

「TOPPOですか？ お菓子の？」

「うん。最後まで諦めない。最後までやりきる。そんな人になりたいの」

「最後までチョコたっぷりですものね♪」

「うん。すっごく美味しいの!」

「マスターらしいです。……マスター」

「んう? 何?」

「私、成長します」

ガシッ!!

「大きくなるんじゃないよね!? 僕を差し置いて大きくなるんじゃないよね!?」

「ははははは。それでですね」

「流された!?!」

「私、セカンドシフトするんです」

「せかんど……しふと?」

そう言えば、気を失う前にも福音の光の事をセカンドシフトって言ってた気がする。

「はい、単純に言えばアップデートです。バージョンアップです」

「んう?」

バージョンアップとかアップデートってパソコンとかで良く言う

けどさ……白式って機械的な印象が凄く薄いから全然ピンと来ない……。

「えっと……今までが『ケーキセット』だったのが、『食べ放題のケーキバイキング』に変更になりました」

「ピンと来た！！ 作戦が終わったらさ、食べに行こう！ モンブランが美味しい季節が近づいてるのです！！（キラリン☆）」

「ふふふ、私は食べれませんよ。マスターが食べている幸せな気持ち^{セツラ}は伝わってきますけどね。——私の名前は只今より雪羅^{セツラ}となります」

「ええ！？ 何でさ！？」

「単純に言えばハマチがブリになるかのような感じですかね」

出世魚かぁ……でも白式って魚じゃないし、魚臭くないし全然ピンとこないな……。

「えっと……お餅を餡子で包みました！」

「あんころ餅だ！！」

なるほどね。名前も変わるわけだ……。でも何が変わるんだろう？

「今までシャルロットさんに射撃を教わったりもしましたね」

「うん、教わった」

「雪片式型を二刀流でも使いましたよね」

「使ったね」

「セシリアさんにブルーティアーズも借りましたね」

「前に借りたね」

「マスターは回避がとても上手ですよ」

「そうかな？ えへへへ♪」

「それらを全部載せましょう！ 更に追加武装も盛り沢山！！」

「そ、そんな！？ クレープに全トッピングなんて零れちゃうよ！
？ でもクリームは減らさないでね！」

「ふふ、私が初めて零落白夜を使用した時の事を覚えてますか？」

「またやんわり流された！？」

「はい、エネルギーを吸収したんですね。あれには極端な負担が掛かり、アレ以降は使う事が出来ませんでした。エネルギー兵器による攻撃は展開装甲で吸収することが可能となりました。これで、シールドエネルギーが切れる心配も大幅に無くなります。第2形態になりますと更に消費が激しくなりますからね。そんな消費もカバーし切れるほどの吸収性能を併せ持ちます」

「僕の話聞いてないけど、凄そうだね！！ あれ？ でもさでもさ、空きスロットとか言うのが無いんじゃないの？ 確か、雪片式型だ」

けで使い切ってるとか言ってなかったっけ？」

「確かに第2形態となったのち、少しばかりの余裕が生まれるとはいえ、全部載せは限度があります。しかし、それを可能にしたのが展開装甲なのです。これに全てを登録してしまつて、使う時に切り替えて使用すればいくつでも搭載できるわけです。切り替えて使用するため、攻撃中の敵弾吸収は不可能だったりしますが、私とマスターの力が合わさり、炎となったガンバスターは無敵です！！」

「何だかよく分からないけど、凄そうだね！！」

S i d e 織斑 千冬

「通信はまだ回復しないんですか！？」

「無駄だ。恐らく連中の方で切っている」

命令違反の5機のISは交戦を続けている。呼び掛けにも応じず、あちらからの呼び出しも無い。全く、手のかかるガキどもが。しかし、一夏を想つてというところもあるのだろう。目を覚ました時が大変だぞ一夏。

だから……早く目を覚ましてくれ。……一夏。

バンッ！！

「先生！」

「先生！！！」

「……」

勢いよく開かれる襖。入室は禁止と何度も言っておいた。だからこそ、反射的に私も大声で対処する。

「入るな！！ 作戦中だぞ！！」

「わ、分かっています……ですが……」

「お、織斑きゅんが……」

「ふええええんっ！」

「っ！？」

意識不明だったはずだ。それが出撃したとでも言うのか！？

「おーかし♪ おーかし♪ お祭りだー♪」

………。

「『私達のお菓子だけじゃ足りない』って食べ歩きを始めてるんです。さつき、旅館のお土産屋のお菓子も食べちゃって……」

「修学旅行に来てる皆のお小遣いと、売店のお姉さんの給料が飛びました」

「ふええええんっ！」

「千冬お姉ちゃん！ お菓子下さい！！ ギブ・ミー・ちょこれーと♪」

ぺちんっ

「痛あ……駄目かあ……他にお菓子持ってる人はいないかな？」

ぎゅっ

「んう？」

「馬鹿者……馬鹿者……」

「織斑先生……」

「お姉ちゃん？ どこか痛いのか？ 大丈夫？」

一夏は私の頭を撫で始める。

まるで、覚えていなかったかのように。いや、むしろ何もなかったかのように

「心配させるなといつも言っているだろう」

「ごめんなさい。でもねお姉ちゃん。もう一度だけ許して？」

「……行くと言うのか？」

「うん。だって僕、男の子！」

「織斑くん！？ 織斑先生も！！ いけませんよ！ さっきまで意識不明の重体だったんですよ！？」

山田君が止めるのは尤もな話ではある。だが――。

「必ず帰って来い。心配させる様な映像が表示されればすぐさま作戦は中止だからな」

「織斑先生!？」

「たぶん大丈夫なのです!　だって僕達もっと強くなりましたから!」

僕達……?　白式のことか……?

「ねー、せっちゃん♪」

『はい、マスター♪』

せっちゃん?　白式ではないのか?

S i d e o u t

第15話「吼えろ男の娘! トッポをねらえ!」(後書き)

感想は随時受付中がんです。

◆はい、前回の後書きどおりになりましたね。『今回はセカンドシフトのご予定です!』ほらね? 予定だったでしょww
というわけで、最終決戦自体は次回に持ち越しです。
次回こそ……。

◆お菓子食べ過ぎ? まあアレだ。『生体再生能力』が、糖分を非常に消費するものだったと強制認識してしまえば気が楽になるよ。

【良くある没ネタ】

「お願いせつちゃん! 戦ってえええ!!」

「……分かったわ 一夏。合体しましょう!!」

ジャキーンッ!

「合体した僕達をただのISと思わないでよ?
みんなの、みんなの思いが詰まってるんだからー!!
せっちゃんアレをやるよ!」

「ええ、良くってよ」(ドヤ顔)

「すーぱー！」

「イナズマ！」

「「キイイイック！！！」」

ちゅどーん☆

※せっちゃん……雪羅

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2662t/>

IS 織斑一夏は男の娘

2011年10月10日02時15分発行